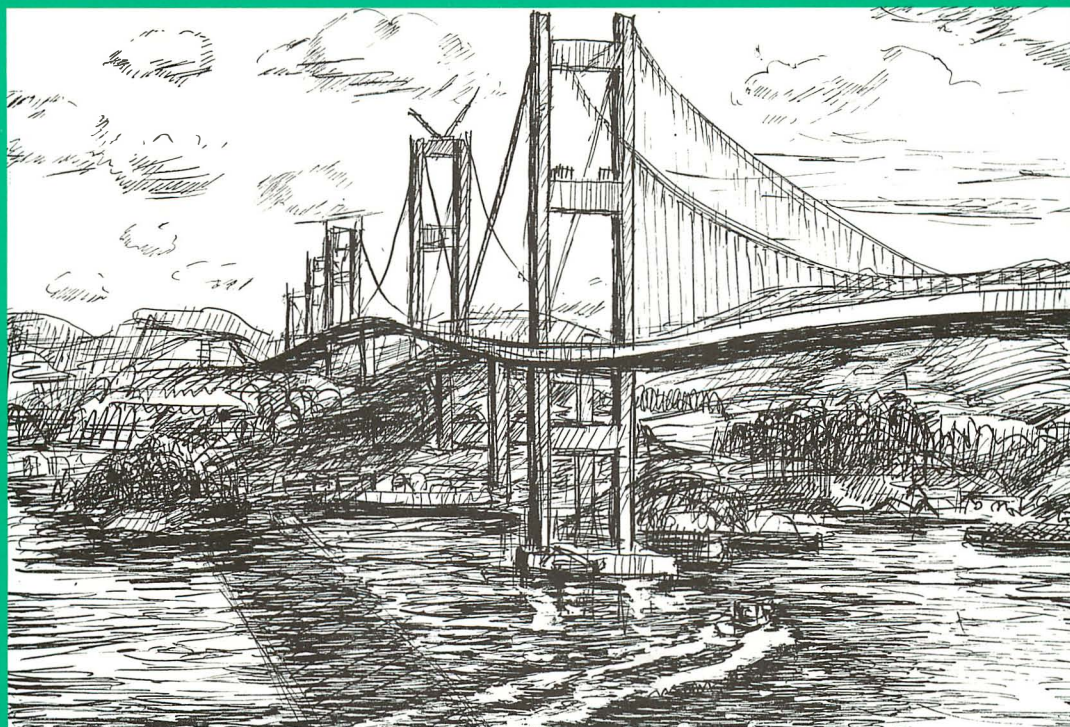


まちづくりネットワークえひめ

舞 とうん

還暦記念号

VOL 60



来島海峡大橋

特 「1999 時代が変わる 何かが芽生える」 集

—住民主体の地域づくりの胎動—

- 共生の新しい時代を求めて
- お寄りよ!! 環境情報基地エコショップへ
- あじさいの里づくりで老人元気! 地域も元気!
- OPEN THE GOODWILL
- パートナースhipの社会へ

■ 特別寄稿 21世紀の地域づくり—

★ 無事な思想を見つけることから

哲学者 内山 節

★ 多自然居住の構築に向けて

早稲田大学教授 宮口 侑迪

★ 地域づくりビジネスが拓く21世紀の地域づくり

地域総合研究所所長 森戸 哲

好評連載

■ 歩キ目デス&足ラテス 岡崎 直司

アングル

明るくさわやかで活力ある愛媛づくり……(財)愛媛県まちづくり総合センター理事長 愛媛県知事／加戸 守行 …… 1

特集

『1999 時代が変わる 何かが芽生える』

—住民主体の地域づくりの胎動—

共生の新しい時代を求めて ……	明 浜 町／片山 元治 ……	2
お寄りよ!! 環境情報基地エコショップへ ……	中 島 町／青柳富久栄 ……	4
あじさいの里づくりで老人元気! 地域も元気! ……	新 宮 村／高橋 資明 ……	6
OPEN THE GOODWILL～使命のゆくえ～ ……	新居浜市／長井 秀旗 ……	8
パートナーシップの社会へ ……	松 山 市／菊池 修 ……	10

特別寄稿—21世紀の地域づくり—

無事な思想を見つけることから ……	哲 学 者／内山 節 ……	12
多自然居住の構築に向けて—パートナーシップと複合化— ……	早稲田大学教授／宮口 侗迪 ……	14
地域づくりビジネスが拓く21世紀の地域づくり ……	地域総合研究所所長／森戸 哲 ……	16

座談—まちづくり—

21世紀の地域づくりと“まちセン” ……	(財)愛媛県まちづくり総合センター運営委員会より ……	18
----------------------	-----------------------------	----

『舞たうん』還暦祝表紙展

『舞たうん』読者の声・こえ・声

研究員レポート

宮崎県田野町で学んだ特産品と地域づくり ……	小川 龍児 ……	27
夢はさりげなく したたかに ……	伊手 博志 ……	28

MY TOWN うおっちんぐ 歩キ目デス&足ラテス

実践ウォッチング “五十崎町篇” ……	岡崎 直司 ……	30
---------------------	----------	----

しまなみ海道開通応援談

海の水軍ネットワーク 狼煙リレー ……	北 条 市／菅 泰晴 ……	32
笑顔を運ぶトイマップ ……	伯 方 町／中野 和美 ……	33

Information

交流拠点施設続々オープン〈大三島町・上浦町・伯方町・吉海町・今治市・玉川町〉 ……	34
まちセン特選イベント情報 ……	36

特集「一九九九時代が変わる」

何かが芽生える

今号のテーマ 住民主体の 地域づくりの胎動

一九九九、空から魔王が降りてくるかどうかは別にして、今まさに時代は、大きな転換期を迎えています。

右肩上がりに慣れ親しんでいた頭と体を、急に切り換えることは難しいでしょうが、それができなければ、いずれ滅びるのを待つのみでしょう。

地域づくりの世界も、これまでの行政主導から住民主導へ、CITIZENたる市民が主役の時代になろうとしています。そこで、今号では愛媛県内での新たな“うごめき”を特集で取り上げてみました。

また『舞たうん』還暦記念号として、特別寄稿をいただくなど、ちよっと欲張った編集をしました。

(編集子
jf)

表紙の言葉

島から島へと、船に乗って何度か渡り歩きました。そのまま本州に移動し、島国の悲しさか、広い本土に上陸した喜びに感動した事もありました。

その島々を、結ぶ橋の開通が目前に迫ってきました。旅だから船も良かったのですが、生活をする島の人々にとって、待ち侘びた日がやっと来たのです。

御伽話に出てくる“いなばの白うさぎ”であってはいけません。が、卯年に向けて、大黒様も恵比須様も福を持って島に渡ってください。

柳原 あや子



明るくさわやかで 活力ある愛媛づくり

財愛媛県まちづくり総合センター理事長

愛媛県知事

加戸 守行



このたび、財団法人愛媛県まちづくり総合センター理事長に就任いたしました。

私たちのふるさと愛媛県は、石鎚山や瀬戸内海、宇和海などの恵まれた自然や俳聖正岡子規に代表される心豊かな県民とで成り立って参りました。現在に生きる私たちは、先人が築いてきた歴史、伝統、文化、産業を受け継ぎ、これらを正しく発展させ、更に豊かな資産として、次代の県民

に譲り渡していくべき使命と責任を負っております。

しかし、今日の経済社会情勢を見ると、戦後最悪ともいわれる経済不況、地球規模の環境問題、少子・高齢化の進行、高度情報化や国際化の進展など、様々な課題や急激な時代の変化に直面しております。

このような課題や時代の変化に的確に対応し、思い切った自己改革を行い、何よりも自由闊達で風通しのよい「明るくさわやかで活力ある愛媛」をつくるのが、私の基本目標です。

そして、その基本理念は、民主主義の原点である住民主権、民意反映、住民福祉を三本柱とした「県民の、県民による、県民のための県政」の推進です。

私は、このような基本的考え方のもとに、県政を推進して参りたいと考えております

ので、よろしくお願い申し上げます。

さて、今日、地方分権が進む中で、地域住民自らが知恵を出し、行政と力を合わせて地域づくりに取り組むことは、今後ますます重要になってくるものと思われまます。

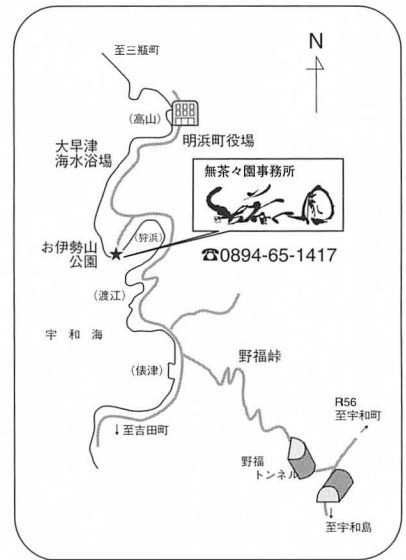
私は、ここだけにしかないという個性のある産業おこし、地域おこしを奨励する「一村一顔運動」を推進し、自分たちが住むまちやむらに誇りを持つことのできる地域づくりを応援するとともに、コミュニティ活動やNPO活動についても支援していきたいと考えております。

愛媛県まちづくり総合センターは、昭和六十一年の設立以来、情報の提供やイベントの支援、人材養成などの面から、まちづくりやおこしのお手伝いをして参りましたが、このような官民の垣根を越え、一体となって地域づく

り活動を支援する機関は、全国的にも珍しく、ユニークなものです。

中でも、活動現場の生の情報を、県内はもとより全国に発信していくことは、重要な事業の一つですが、この情報誌『舞たうん』も、昭和六十二年の発刊以来、今号で六十号となりました。人間で言えば、還暦ということになるわけですが、今後とも一層内容を充実させ、次は百号に向けて更に努力していきたいと思っております。

これからも、市町村や関係団体などと十分連携をとり、これまで築いてきたネットワークと持ち前のフットワークを活かしながら、住民の主体的な地域づくり活動の支援に積極的に取り組んで参りたいと考えておりますので、当センターの活動に、一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。



と予想しています。そして、企業と組合がいろいろ提携することも考えられます。

親の背中を見て育った子供達が、朝から晩まで土と汗にまみれて働く親を見て、こんなつらい仕事したくないから親を捨て、故郷を捨てたのか。親が、ギンギラネオン文化の都会に憧れ、田舎を卑下し、汗と土にまみれる崇高な生業を忌み嫌い、子供達に後を継がせなかったのか。今、新規農業就業者は医者になるより少ない。そして農業就業者の高齢化がますます進み、農地は荒れ、田舎は死に体化しつつある。

我が明浜町も高齢化率33%、就農人口の激減で、農村社会の崩壊は時間の問題となってきたいます。また、農業のグローバル化の中で、アメリカ並みとまではいかないにしても、EU並みの経営規模拡大は避けられないと思います。

農業の大規模化には、企業経営と協同組合経営がありますが、私は日本では、企業と組合が混在する形になるもの

農業者、機動力のある機工部隊が必要です。そのためには、農作業の機械化、単純化を急ぐとともに、どうしても機械化できない部分の労働の確保が重要な課題となつてきます。

私達は、いつの間にかお金のために労働するようになりました。かつて家族は、親父の仕事、母ちゃんの仕事、子供の仕事、爺ちゃん・婆ちゃんの仕事、皆それぞれの仕事をして家族が成り立っていました。これを「協同労働」と言うそうです。つまり、労働は、生活費を得るばかりでなく、人生教育、社会教育の場であり、生きる喜びの場であり、奉仕の場でもあるのです。

お金だけでは換えきれない多様な価値のある労働、それが協同労働なのです。

「家族で生活する」から「地域社会で生活する」に、勿論プライバシーとか個人の尊重は大切にしなければなりません。が、「個人で働く」から「みんなで働く」という考え方、

みんな仕事を作り、地域で楽しく生きていける基盤を作る。つまり、協同労働の地域再生こそ、地域社会の再生につながるものと確信します。

二十一世紀は、人類ばかりでなく、地球のすべての生き物達と生きる喜びを分かち合える時代だと考えます。そんな目で経済活動を見ていますと、田舎には営利活動を越えた、かつての運命共同体を二十一世紀に進化させたような組織。非営利、共同の地域社会協同組合が必要だと思います。

揺り籠から墓場までの新しいムラ作り

私達は、日本経済が国際化していく中で価格の投機的要因の増大、経済性の追求からの機械化、大規模化。異常気象からくる生産の不安定化等の条件を加味して、無茶々の里の急峻な段々畑での柑橘農業専業では、近い将来生活が困難という結論になりました。

しかし、私達は自分たちが

生まれ育ったこの故郷の大地にしつかり根ざして未来に向かつて堂々と生きていきたいと思っております。故郷には私達の文化があるのです。その文化を守る、受け継ぐ。遠い先祖が培ってきた文化を味わいながら故郷の大地に帰る。経済構造、生産現場が如何に変化しようとも、故郷は永遠でありたいものです。地域協同組合「無茶々園」の究極の目的は、兎追ししこぶな釣りに故郷の再生です。

そこで、故郷を出ていかずに生きていくにはどうすればいいか。故郷とは、子供を育てる場所、年老いて大地に帰る場所、経済の戦士たちが戦いに疲れた身を休める場所。そのための最高の条件を整備すればよい、しなければならぬと考えました。

小学校の低学年までは父親の背中を見、母親の深い愛に包まれて育てることのできる環境。小学校高学年になると子供は皆の宝という観点に立

ち、共同生活を始め、老人たちとの共生も含め、皆で生きるという生き方を学ぶ。学問もできる限りやらせ、経済活動に疲れたときには元気になるまで故郷で休養し、また戦いに出る。年寄には生きがいの仕事をやってもらい、在宅介護で一人も寝たきりにしない、させない。

故郷基盤ががっちり構築できれば、一番遠い国に行くとしても一日あれば行けるのですから、経済基盤の構築は大きく言うならば世界中どこでも可能ということです。

私達は地域で楽しく生きていくため、問題点を整理し、目標を掲げ努力していききたいと思っております。

①自分達で作ったものは自分達で売る。

②現役の大衆遺跡、白い段畑の維持管理は、柑橘農業だけでは経済競争に生き残れない産地であることを認識し、梅、花木等柔軟に取り組む。

③大規模環境保全型農業、十



集落福祉をどうするか、専門家を交えての勉強会

箇所、百ha規模の総合農業をめざし、集団出作りを始めます。
④地元ばかりでなく、都市の人達とも事業提携をしていろいろな仕事を起こします。
⑤新規就農者をどんどん増やします。

⑥非農家の農業支援を積極的に取り入れます。

⑦海外農家との連帯を深め、生活交流、事業提携、労力交換等に取り組みます。

⑧無茶々園会員20名以上がホームヘルパー三級を取得しました。介護法の隙間にあたる年寄も含めて集落介護をどうするか介護問題は模索中です。

⑨新しいムラ作りを何からやろうか、皆で悩みます。

特集

「一九九九

時代が変わる 何かが芽生える

—住民主体の地域づくりの胎動—



五名で、中島町生活文化女性塾は誕生しました。

特徴は、専門部会制で活動していることで、福祉や環境問題、町政を知る学習、自己確立のための学習などに取り組んでいます。

その中の環境部では「海の恵みなしでは生活できない島人に、海の悲鳴に気付いて欲しい」という願いから活動を開始しました。

合成洗剤や生ゴミ



「人魚の思い」エコショップ入り口の絵付け

EM & ハーブ のやさしさ

手作りプリン石鹸「はまんぼ」

肌荒れにお悩みの方、環境ホルモンを出す合成洗剤は「NO!」
と言えるあなた!

ぜひ 使ってみてください。ローズマリー入りです。

使い方 (希釈倍率)

- | | |
|-----------------|-------------------|
| ☆ 浴用 (髪・体) 50 倍 | ☆ 洗濯用 4 倍液を 1 カップ |
| ☆ 食器等台所用 8 倍 | ☆ 換気扇等 4 倍 |
| ☆ 床等 30 倍 | |

倍率は目安ですので使いよいように調節してください。

4 倍液を作っておくと便利です。

中島町生活文化女性塾

(Tel089-997-1111)



が海に与える影響を学習することから始まり、ボカシや廃油石鹸の作り方、使い方の講習会等を定期的に開くようになり、今は毎月第一土曜日の午後に行っています。

さらに昨年は、他団体を巻き込んだ「環境ホルモン勉強会」「島一周カンカン(缶環)ウォーク」を実施しました。

「エコショップ」の開店

工夫や改良を重ねて作った女性塾の石鹸やボカシは、たちまち人気商品となりました。しかし、住民により広く深く環境問題に関心を持ってもらうためには、どうしても情報発信基地が必要でした。

幸いにも活動を支援してく

ださる方から空き店舗を借りることができ、平成九年十月に、念願の環境情報発信基地を「エコショップ」と名付けてオープンさせました。

毎月、第二・第四金曜日に開店していますが、開業以来一度も休むことなく現在に至っています。

店には、手作り石鹸やボカシの他にも、環境に優しい生活用品を色々揃えています。また、環境問題に関する書籍も展示したり、貸し出したり、環境保全への関心と理解を求めて、可能な限りの情報発信を心がけています。



エコショップ店内（毎月第2・4金10:00~14:00）

一部の女性に限られていた利用者の数も、口コミ効果で増加し、男性や小・中学生も立ち寄ってくれるまでになりました。

店のスペースの半分までを占めるフリーマーケット・コーナーも好評です。「あなたの不要品は、私の必需品」のキヤッチフレーズのもとにいろいろな商品が集まります。

持つて来られた品物を店で預かり、売れたらその代金の七割を預かった方にお返しするやり方で、預けた人にも、買った人にも喜ばれ、しかもゴミ減量にもなり、一石三鳥です。

三月からは、毎月発行される町の広報誌に「エコショップ」だより「のコーナー」が設けられます。「譲ってください。譲ります。」の呼びかけで、新たな展開を期待しています。

一人の百歩より

百人の一步

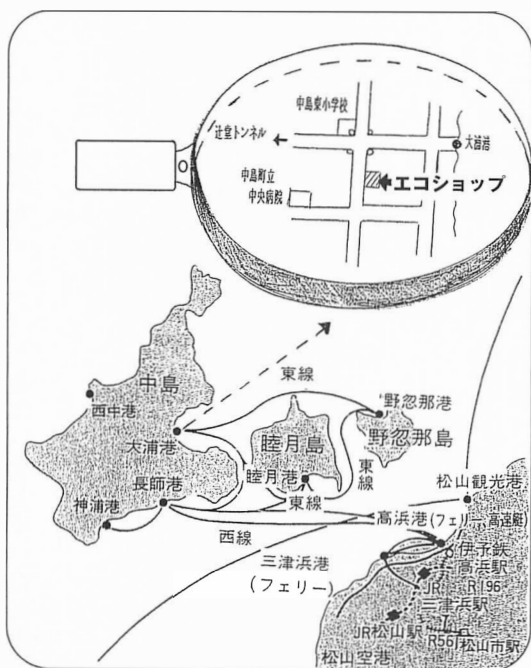
小さな島の小さな町で、社

会的には何の力もないおばちゃん達が、限られた時間の中で、住民を巻き込んだの活動は、実に大変ですが、子供の未来を思うと、じつとしていられません。

一人の百歩より百人の一步と言います。女性の目線で暮らしを見直し、海の悲鳴が聞こえなくなるその日まで、地球に優しい生活情報を発信し続けてゆきたいと思っています。

皆さん（立ち）寄ってよ!!

エコショップへ



左から青柳塾長、エコショップスタッフの村上さん、高橋さん

特集 “一九九九 時代が変わる 何かが芽生える” —住民主体の地域づくりの胎動—



ですが、住めば都、ふるさとを守り、ふるさとを少しでも良くしたいこう、一つでも自慢の出来るものを残したい、そんな思いで、あじさいグループの会長を受け継いだのが四年前でした。

私たちの住む中野集落では、昭和五十年頃から生活改善グループが、農道の沿線約二・五kmに、あじさいの苗木を年に数百本ずつ植え続けました。それが、十

年後には約五千株となり、いつの間にか、農道があじさいロードと呼ばれるようになりました。そこで、グループ名も「中野あじさいグループ」と改称し、最初のあじさい祭が行われたのが、十年前の平成元年でした。その間、前会長の大西武さんがグループの基礎をつくって下さいました。

新宮あじさいグループ
私たちの住む新宮村は、四国のほぼ中央にあり、新宮茶で少しは知られる程度の山間地、四国で唯一高速道路のインターチェンジのある村です。人口わずか二千人、うち四十％に近い高齢者と過疎の村

しかし、高齢化社会が進む中、中野集落十八戸の小世帯のグループでは、活動が難しいので、私たちは新宮村内東部地区の八集落へ呼びかけ、理解を求めながら、組織の拡大に努めました。そして、グループ名も「新宮あじさいグループ」と改称し、以前は三十名程の会員が、現在は八十八名と三倍近くになりました。でも平均年齢は六十才代。まさに高齢者の組織です。

悩み—夢—実現へと

あじさい祭も回数を重ねるごとに、マスコミ等の宣伝も効を奏し、遠来からのお客さんを多く迎えるようになりました。しかしながら、あじさいの名所としては、今一つ物足りないというのを、自他ともに認めざるを得ませんでした。何とかしてあじさいの名所にふさわしくなるよう、会合の

つど話し合いをしていた矢先、五戸の農家から、休耕田、草生地など三町歩（3ha）余の善意の提供があり、この地へ将来の夢を託すべく、青写真を作成し、夜の明け方まで何晩も話し合いました。





「あじさい茶屋」の屋根葺き、後方が「あじさい園」

幼稚園の児童や教職員、保護者の皆さんにも、お世話になりました。

奉仕作業に参加した、ある高齢者曰く「今日の奉仕作業に参加して本当に良かった。多くの人たちと一緒に作業や話が出来た。一日を老夫婦二人だけで平凡に過ごすより、充実した一日だった。」と。これこそ高齢者の生きがい対策？有り難いことです。汗を流し俺達が必要なければ地域が良くならないんだとの心意気があればこそ、六百余名の奉仕作業があったと、私ども役員は感謝と感激で一杯でした。

ある老参加者の歌

「若者と植えしあじさい

背丈になるまで見よう

命延ばして」

には実感を覚えました。

これからが胸突八丁ですが、今年三月から六月までに
・遊歩道のコンクリート舗装
・もみじ（寄付）の植樹
・茶屋の内外装の整備・落成

・こいのぼりの設置
・あじさいの里の碑の建立
・モノレール（寄付）の設置
・周辺環境整備等々……を予定しており、これらについても大半を奉仕作業で、完成をめざし頑張ります。

また、新宮村へ公衆トイレの設置等々も要請しており、年度当初には着工の運びです。事業が完成するまで、夜もゆっくり休めそうもありません。

小さくても

キラリと光る村に

あじさいロード周辺に五千株、あじさい園内に一万株、合わせて一万五千株のあじさいに、大輪の花が咲くのは、そう遠くはありません。その時は四国一いや西日本の……夢は大きく膨らみます。

私たちの手造り観光「あじさいの里」と、新宮村が来る五月二十五日にオープンさせる「文化の里」（霧の森）と七月オープンの「高原の里」（霧の高原）この三つの里がとも

に相乗効果を發揮して、私たちの村が小さくてもキラ星の如く輝いた村になるように期待をし、多くの皆様のお越しをお待ち致しております。

時代が変わろうとも、「ふるさととはありがたきかな」と言ってもらえるように努めるのが、ふるさとを守り暮らす私たちの使命だと思っております。

帰っておいでよ！ふるさとへ。山も水も空もきれいだよ。



左から会長の高橋さん、副会長の大西さんと高橋さん

特集

“一九九九 時代が変わる 何かが芽生える” —住民主体の地域づくりの胎動—

五つの支援

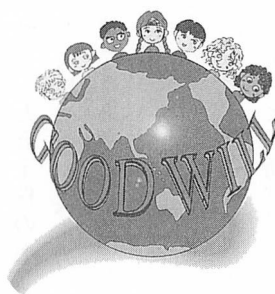
GOODWILLは、郷土の手づくり品や福祉施設の商品、海外NGOグッズなどを委託販売するボランティアショップの運営と、ボランティアを支援する五つの事業を行っています。



「Helping you helps me」を合言葉にオープンしたボランティアショップGOODWILLは、多くの皆様方の温かい心に支えられて、設立からはや一年半を迎えました。

の情報や行政情報を集め、広報紙などを通じて市民にお知らせをする。三つ目はネットワーク支援。それぞれのボランティアをネットワークとして、その情報のデータベースとしての機能を果たしていく。四つ目は人的支援。ボランティア団体の活動を強力にサポートする。最後に五つ目が政策

提言。ボランティアに関する調査研究を行い、各方面へまちづくりの政策の提言をしていくというものです。



GOODWILLマーク

ボランティアを支援するボランティア、日本で最初と自負するこの大きな試みは他にモデルがあつたわけではなく、まさに手づくりのスタートでした。それでもここまで続けることができたのは、集まったみんなのミッション（使命感）であつたと思っています。

みんなを幸せにする

ネクタイ

ショップの売れ筋商品に、世界の子供たちの教育支援をしているセーブ・ザ・チルドレン（本部…ニューヨーク）

のネクタイがあります。

クリントン大統領をはじめ、アメリカで多くの有名人が愛用しているこのネクタイは、子供たちを救う人権保護団体が製作しているもので、子供の描いた絵がデザインされています。一本五千円の売上金のうち、四十パーセント（二千円）が世界中の子供たちの教育支援のために使われます。ちなみに二千円という金額は、アジアの子供一人の一年間の教育資金に相当すると言われています。

また店内では、セカンドハンド（高松市）とタイアップ



店内風景



チャリティLIVE風景

して、カンボジアやバングラデシュの障害者や女性の自立を支援する現地NGOの商品も販売しています。どちらもプレゼントに好評です。

ボランティア基金

GOODWILLが最も力を入れていた事業が、ボランティア支援基金事業（財政援助）です。ショップの売上げはこのボランティア基金の大切な資金源になっています。

昨年十月、オープンから一年が経ち、売上金が目標の五十万に達したことから、第一回目のボランティア基金の応募を行いました。地域の様々な課題に

取り組み、住みよいまちづくりを目指す市内のボランティア活動団体が、平成十年度中に実施する事業を対象として、支援額は一件あたり十万円を限度としました。うれしいことに六団体から応募があり、ある種の手ごたえを感じつつ、十一月末に支援金の贈呈を行いました。

このボランティア基金のポイントとは、市内の民間人などで構成する審査委員会が、応募団体の活動内容や事業内容、支援要望額などの審査を行い、支援金額を決定するシステムをとっていることです。

私たちショップの運営スタッフは、支援金の決定については口出しはしない、というのがGOODWILLボランティア基金の基本的なルールになっています。この基金は、まさしく市民のために、市民自らが運営する基金なのです。

地域とともに

昨年の尻無川の清掃に続き、

二月には初のチャリティLIVEに取り組みました。音楽の楽しさに少しボランティアの精神をプラスさせました。

GOODWILLは、地域とともに、手探りで小さな一歩を歩み始めたばかりですが、これからもまちの小さな小さなボランティアとともに、たえず情報発信を続けていきたいと考えています。

どうかあなたの知恵と時間、そしてやさしさを分けてください。お待ちしております。

〒792-0013
 新居浜市泉池町9-31
 ☎0897-32-7599
 営業時間 毎週金・土・日 11:00～18:00
<http://www.bekkoame.or.jp/~prtybell/goodwill/>



GOODWILLスタッフ（左から3人目が長井さん）



まず、ごく大雑把に言って、この法律の制定の動機は「地方分権」「規制緩和」という大きな流れの中に位置づけられます。その意味で、何かと話題の「介護保険法」とよく似ています。地方分権を語る際には不安視されたのは、

一つは財源問題であり、もう一つは人的能力の問題でした。二つの課題とも、現行の行政システムのままではおおいに不安があることは事実です。

財源問題については、

昨年十二月一日より施行された「特定非営利活動促進法」通称「NPO法」については、皆さんもご承知のことだと思いますので、その内容のあらましは省略をして、それでは何が変わるのか、我々はこの法律をどう活用すればいいのかといった点を中心に私見を述べてみることに致します。

NPOの税制優遇制度が先送りにされた現時点で言うべき事はありませんが、「権限を委譲したとして、それに見合った人的能力がはたして地方にあるのか？」という議論は、官僚という連中の思い上がりも甚だしい、と言うべきです。たとえば地方公務員はこれまでも、満足に仕事をさせてもらえなかったというだけの事で

あり、それは能力の問題ではなくシステムの問題です。むしろ「地域社会のために思う存分仕事したい」のに「出来ない」という悩みを抱えた公務員が大勢おられる事を我々は知っています。

なにより現行の行政システムが最も「見ようとしないう」のが、自立した市民による自律的な公益活動というものでした。為政者は市民の自律的な動きを嫌う、というのは自明のメンタリテイですが、それでは社会が立ち行かなくなつた。熱心で公正な公務員がどれほど頑張っても、行政だけでは社会は立ち行かない。行政にも出来ないことがある、のではなくて、むしろ行政だから出来ないこともある。それがはつきりと解つたのがあの阪神淡路大震災だった、と僕は思っています。

では市場原理に委ねれば全てがうまくいくか？株式会社を僕は相当に良くできた社会システムだと考えていますが、それでも社会トータルではう

まくいかなない、という事を我々は嫌というほど経験してきました。今、最もうまくいっていないのが「個人のミッション（社会的使命感）がどう扱われるか」という点でしょう。介護保険法は公的介護に市場原理を導入する、とよく言われますが、そうではなく、今求められているのは「第三のシステム」だと僕は考えております。それは端的に言って「市民が自律的に担うべきシステム」です。これは介護に限らず、様々な局面で、担うべき「主体」を新たに創設しようというのが、つまりはNPO法の主旨であり、それを前提として、行政や企業との協働をすすめていこう、ということでしょう。今の社会は行政・企業・市民の三つのセクター間のバランスが崩れています。市民セクターを育成することでバランスの是正を図ることが求められているのです。

NPO法によって何が変わるのかといえば、現行では、民間非営利の活動団体が法人格を取れるということに尽きます。しかし、その意義は大きい。これまで、公益的な仕事はお上のやることであり、民間で組織的にやる場合はお上の許可がある、ということになっていたわけです。にもかかわらずやっていた団体はたくさんあったわけですが、法人格を取るためには極めて高いハードルがあり、法人格がないということは社会的にはユレーイみたいな存在だった。これで困っている団体は

たくさんあった。まず正式な契約主体にならないし、国際会議に参加資格がない等々。そのことは活動が充実し拡大し、社会的使命が重くなればなるほど、不自由や不合理の度を増していました。それが、法人格をとれるようになったわけです。

NPO法の使い方としては、現在困っている団体、法人格を必要としている組織は法人格を取ればいい、という事に尽きます。それ以上でも以下でもない。ユレーイでなくなれば権利も得ますが当然に義務も生じます。それが「新た



毎月1回公開講座を開催

な事業主体を創設する」という事の意味です。それは同時に、公的な仕事はお上に押しつけられ済む、という社会が崩れることでもあります。行政の側から言えば、出来ないことは出来ないと言っている、しかし、競争相手が生まれるわけですから、出来ないことをシステムや予算や先例のせいにして済ませられなくなるということでもあります。優遇税制については実績を積み上げながら要求しませんか。

具体的な細部について触れる紙数はありませんが、一人一人が責任ある主体として地域社会に逃げずに向き合っていく仕組みを作るしかないわけで、市民も行政も企業も意識変革と手法の構築を求められます。

「えひめNPO研究会」では昨年五月末の発足以来、毎月一回の例会を市民にオープンな形で開催して、ここにお集まりいただく方々を中心に、

まずは活動状況の基礎調査とネットワーク形成を促し、一定の成果を挙げています。新居浜市では市役所職員有志を主体とした組織横断的なNPO研究会が活動を始めております。現在は県の担当部署とも連携しながら、法人化へ向けてのコンサルティングと、申請書類作成の支援に力を注いでおり、将来的には市民の主導による官民一体となった「市民活動サポートセンター」の設立を目指しております。こうした変革のための基盤整備を、NPO法からスタートさせたいというのが「えひめNPO研究会」の役割かと考えております。

ご一緒に考えませんか？

えひめ NPO 研究会

〒791-8023
松山市朝美2丁目3-21
フリースペース遊民館内
☎089-927-5369
(FAX兼)

無事な思想を 見つけることから



内 山 節
(哲 学 者)

ときどき私たちは、都市は便利でも自然や人間性がなく、逆に田舎は不便でも自然と人間らしさがある、というような言葉を耳にする。そんな言

葉を聞くと、私は本当にそうだろうかと思える。そうではなく、都市の便利さと田舎の便利さは、その内容が違うのではないかと。

都市に暮らしているときは、私たちは、たえず購入することによって便利さを手に入れる。ここでは、便利さは、基本的には購入するものである。

ところが農山村の便利さはそういうものではない。自分がさまざまな技を持つことによって、便利な暮らしがつくられていくのである。何でもできる「便利な人間」になることが、ここでは便利さのための条件である。そうすれば、森も川も田畑も、すべてが暮らしを大きくふくらませてくれる。

二十世紀の社会は、ひたすら大量生産、大量消費の方向をめざした。それが人間を豊かにするというアメリカ的な

発想が、一時私たちを支配した。ところが、そのような傾向が強まるにつれて、私たちは「地域」の衰弱を経験したのである。

もちろん、「地域」の衰弱を招いた要因にはいろいろなことがあるだろう。戦後の激しい人口移動は地域の定着性を弱めたし、新しい住宅地に地域社会が生まれるのには時間がかかる。だが、それだけではなく、大量生産、大量消費の社会が、人々がもっていた「地域づくりの技」とでもいべきものを弱めていったことも、原因のひとつではなかっただろうか。

* * *

地域社会がつくられていくには、ふたつの要素が必要になる。ひとつは、その地域は共有された空間だと人々が感じるようになること、もうひとつは、その共有された空間

を維持するための協同行為が生まれることである。

たとえば農山村をみると、家や庭も、田畑も川も、それぞれが私有している場所である。ところがそこに住んでいる人たちは、その全体は村という共有された空間だとも感じ、その共有された空間を維持していくための村人の協同行為を決めたりする。

町でも同じであって、一軒、一軒は私有地であり、それぞれは独立した仕事と暮らしをしている。ところが、ひとつの町や町並に人々が共有された空間を感じ、それを維持する協同の取り決めや行動が生まれるとき、人々はそこに地域社会が根付いていると感じる。

地域とは、共有という感覚を基礎にして、つくりだされ、守られていくものなのである。この共有という感覚は、そ

の地域にあるものを活用する暮らしがつくりだすものである。たとえば農山村をみると、森をさまざまに活用し、

川を使い、田畑もまた村人の相互性の中で用いられているがゆえに、村人は村に共有された空間を感じる。それは町でもいえることであって、そこに暮らしている人々が相互的に活用しあいながら、自身自身の暮らしをも創造しようとするとき、町の共有性が感じられてくるのである。

とすると、ここで重要となるのは、自然と人間の関係や人間と人間の関係を相互的に活用しながら、暮らしを創造していく力であり、暮らしを創造する技である。

二十世紀という時代は、この技を不必要にする方向ですんだ。必要なものは大量生産され、人間たちはただ消費するだけで十分だった。それ

は地域の自然や社会を活用する技を必要としない暮らしを生み、それに伴って「地域」の弱体化がすすんでいった。

そのとき私たちは、無事な暮らしを失ったのではなかったか。

* * *

近代的世界のもとでは、私たちは誰もが「大きな人間」になろうとしていた。それをめざして、私たちは教育を受け、都市に出て、ときに世界をめざした。そのとき、「地域」という共有された世界も、それをつくりだしていく人間の技も、「大きな人間」になることを押しとどめるものにしかみえなかった。

しかし、そんな一時代を経て、いま人間たちは何を得ることができたのだろうかと思う。E・H・フロム流にいえば、私たちは「根無し草の人間」になっただけだった。そ

してケインズ流に言えば、「貨幣愛というアメ玉」をしゃぶらされ、経済の動きに翻弄されるばかりの人間になった。

暮らしをつくる技を失い、消費しつづけるばかりになっていった。たえず、より「大きな人間」にならなければいけないという思いに圧迫されながら、現実には不安な人間になっただけなのである。

私たちが変えなければいけないのは、このような人間観であろう。「大きな人間」になる目標をめざして生きていく生き方から、そのとき、そのときの自分の役割を感じとり、その役割をはたしていけるような人間として、自分を存在させていくことであろう。

自然はいま自分にどんな役割を期待しているのか。地域の人々はいま自分に何を求めているのか。そして社会や世界は、私という人間にどんな

役割をはたしてもらいたいか。そんな自分の役割を感じとりながら、それに応えていける自在な人間。

その自在な人間たちがつくりだす無事な社会が、「地域」なのではないだろうか。自在に役割をはたしていく技をもった人間たちが、無事な自然と人間をみつげだしていけるローカルな共有された世界。ここに生まれる「地域」を基礎にして、さまざまな世界と自由に交流していく人々。

「地域」をみつけないおそうとする今日の動きは、自然と人間の無事とは何かを探しだそうとする模索でもある。

プロフィール

(うちやま たかし)

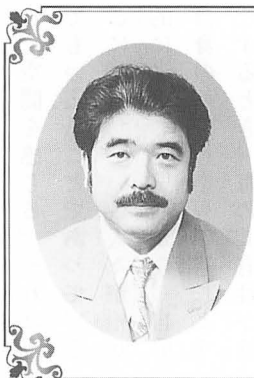
・存在論の視点から、自然と人間、労働、時間などの考察を続ける。

・東京在住。群馬県上野村にも家を持ち、30年近くこの2つの場所で暮らす。

多自然居住の構築に向けて — パートナースhipと複合化 —

宮口 侗 迪

(早稲田大学教授)



新しい全国総合開発計画「21世紀の国土のグランドデザイン」の戦略の柱の一つとして、「多自然居住地域の創造」が登場した。これは、都市化や拡大成長が発展のキーワードであった前の時代に対して、

人口減少時代を迎えようとしている今、中小都市と農山村が、必ずしも人口増加を前提としない型の発展を目指すべきではないかという議論から生まれたものである。

高度成長期以来拡大成長路線を突っ走ってきたわが国は、今初めて長引くマイナス成長の厳しい現実にとらえられているが、この多自然居住という議論は、必ずしもそのために生まれたわけではない。

かつて成長する地域の陰に広大な面積の人口減少地域が生まれ、そのかなりの部分が過疎地域という概念でくられた。そして今、東京を始めとする大都市地域こそ人口の伸びは頭打ちになったが、全国の県庁所在地とその隣接市町村の人口はまだ増加基調にある。これらの地域は、職場と都市生活の利便性、そして住宅事情の良さを兼ね備えていて、いわば普通の人びとがオーソドックスな現代生活を

営みやすい地域だからである。このことは、全体人口が増えない今、利便性に劣る農山村や小都市の人口がこれからも減少することを意味する。

過疎という表現自体が、かつては人口が多かったにもかかわらず、今は人が減って困っているというとらえ方である。そして多くの過疎地域では、さまざまな困難をすべて人口減少に起因するものと考えてきた。筆者は、人が減ったことを意識するよりも、これからは人口は増えないことを前提にして、少ない数の人口で、主体的に地域を動かすしくみを新しくつくっていくことが大事だと、かなり以前から言い続けてきた。

国土庁の「人と自然小委員会」で、人口が減っても、国土空間がうまく使われて新しい生産のしくみが生まれ、一人あたりの生産力が増えているようななら、地域は発展的状态にあるのではないかという指摘をした。数が増えること

ばかりが発展ではないという発想である。そこから、少ない人口で空間を多面的に利用する、魅力ある低密度居住という考え方が生まれ、あれこれ議論しているうちに、筆者が、いつそ多自然居住とでも言ったらとつぶやいたのが、どうもこの言葉の発端らしい。

したがって、多自然居住地域とは、単に自然の中で暮らすということではなく、今なお都市的な原理にのっとって成長する可能性を持っている中核・中核都市に対して、停滞する中小都市と周辺の農山村をくくって、それとは異なる発展のしくみを追求する場とする考え方なのである。これは、今までのような都市化と拡大成長の中でつくり出されてきたしくみとは一線を画して、少ない人口でそれとは別のしくみを新しくつくり出していきこうということに他ならない。グランドデザインの多自然居住地域が、「21世紀の新たな生活様式を可能と

する国土のフロンティア」と書かれているゆえんである。

ただ都市化によって普遍化された現代生活には、ある程度の都市機能との日常的な接触が不可欠である。たとえば総合病院や書店、レストラン、スーパーマーケットといった機能を思い浮かべてもらえばよい。したがって、まわりに農山村を持つ中小都市はその核として、都市機能をそれなりにグレードアップする必要がある。そのためにはまわりの農山村との役割分担やパートナーシップのための本音の話し合いが不可欠になる。

* * *

多自然居住地域が発展的に創造されるためには、場の使われ方が発展することが不可欠だと思う。これは、農地・林地に關しても、小都市の商店街に關しても同じである。

たとえば後継者のいない農家の耕地を、誰がどんなしくみの上でどのように使えば、そこに望ましい生産力が生ま

れるかということが、創造的に解決されていかなければならない。この時、後継者のいない農家が活用できる人材（他人）にその土地を託することと否定的であれば、新しいしくみは生まれえないと思う。その場を今まで以上に活用できる力を身につけるかあるいはその力を持った人にパワーを発揮してもらうことが大事である。

中小都市の商店街も、親の代から受け継いだ商店をそのまま維持することがほとんど不可能なこの時代に、商店や商店街という場をどんな形に変えていけば、今の時代にそこが活気ある場になるのかという方向づけが何よりも大切である。ここでもパワーを発揮できる人がその場を使えるようにし向けていくことが望ましい。お店の数は減っても、評価の高いレストランが生まれたり、まわりの農山村とのパートナーシップによって特産物の出店ができたりするこ

とに価値がある。そのそばに高齢者のたまり場がつけられるのもよい。

取引相手にしろ、共同経営者にしろ、人口の少ない地域では、望ましいパートナーがすぐ近くにいるとは限らない。従来よりも大きな広がりの中で望ましいパートナーを見つけることによって、新しい展開が可能になる。

* * *

もう一つのキーワードは、複合化だと思う。四季のはっきりしたわが国では、自然を生かした産業は、季節の推移の中にいろんな生産過程を取り込んでいかなければ、年間で望ましいレベルの生産力を生み出すことができない。したがって、ここには複合的な発想やマルチ人間の登場が不可欠である。また筆者は、この山村にも一つぐらいいは、土地の多様な産物を他の地域へ届けるミニ総合商社が成り立つのではないかと考えている。それぞれの産物が大きな

縦割りの流通機構の末端にぶら下がってきたことが、自らの取り分を少なくしてきた。

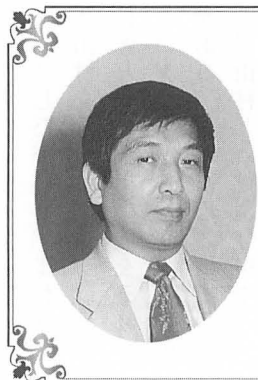
筆者はかつて山村の農林業組織が、建設的業務をも中に抱え込むことによって、無駄なく通年の作業が確保できるのではないかと考えた。林道工事や、圃場整備工事など、農林業のための投資が、建設業界に流れているからである。しかし、今はむしろ建設業者が、環境整備的な仕事を取り込んでいくことが現実的ではないかと考えるようになった。これからは、無理に山を刻んで道路をつけるよりも、自然の修復の仕事が増えるはずである。そのためのノウハウを蓄積し、自然を預かる複合的産業が山村に生まれることを期待したい。

プロフィール

(みやぐち としみち)

- ・専門は地理学・地域社会論。
- ・国土審議会専門委員、過疎問題懇談会委員、全国地域リーダー塾主任講師等も務める。
- ・富山市に住み、毎週東京に通う生活を10数年続ける。

地域づくりビジネスが拓く 21世紀の地域づくり



森 戸 哲
(地域総合研究所所長)

私たちは、世紀末を不況という長いトンネルの中で過ごしている。この暗い状況から一刻もはやく脱出したい気持ちです。ますます強まっている。かといって、トンネルを抜け出したら、再び同じ風景の中

にいるのでは、これまた、やり切れない気がする。

金融システムの「救済」とか日本経済の「再生」などの大義名分によって、旧来のシステムが温存されたまま21世紀を迎えるというのでは、これまでの地域の苦労が報われないと思うからだ。

トンネルの中にいる間に、今に至る地域づくりのシーンを振り返りながら、私たちなりに少しでも賢くなる努力をしなくてはなるまい。

* * *

旧来のシステムの網の目からは、こぼれ落ちたような形ではあるが、新しい地域づくりの胎動が感じられる。そのひとつが、地元の人たちを中心とした地域への、地味だが着実な投資活動である。

例えば、滋賀県長浜市の「黒壁」の活動がそうである。衰退した中心市街地の空間を再生し、硝子製造という、それ自体は地域にとって全く唐突で目新しい産業を起こし、ツーリズムを梃子とした地域

の振興をはかっている。

長野県小布施町では、栗菓子（こし）の工場や店を含む中心部の町並みを新しいデザインで再構築した結果、多くの来街者を吸引している。

鳥根県大田市においても、大森銀山の疲弊した古い町並みで起業した夫妻が、周辺の空家や空き地を買取り、新しい用途を生み出し、地域社会の活性化を目論んでいる。

これらは、単なる産業おこしではなく、むしろ、まち空間に対する投資といえるものであり、企業活動をはじめとする、まちの中の諸活動は、今後の社会状況に応じて多様に変化すると思われる。

大分県の由布院も、不振にあえぐ全国各地の温泉観光地の中で、善戦している。「田園と湯けむりの里」という空間

を演出するために、ポイントとなる街角の土地や水辺の土地を買取り、修景してきたのは、ごく少数の旅館経営者たちである。閉鎖型の伝統的な旅館空間をセミ・パブリック

な交流の場に転換してきたのも彼らである。

長年にわたる、まち空間に対するきめこまかな投資がここへきて確実に効を奏しはじめたといえるだろう。

以上は、ほんの数例にしか過ぎないが、まち空間に対するこのような投資において、注目されるのは、地域に暮らす者の視点からなされている点である。事業の展開も、地域内の再生産を拡大することが重視されている。

実際、こうした投資の結果として、関連した多様な小ビジネスが発生している。長浜、小布施、由布院などでは、物販・飲食、工房をはじめ、多彩なビジネスが登場して、それなりに地域の経済指標を大きく引き上げている。

また、行政投資も、地域住民の生活感覚を大切にして、民間投資に連動した場合には、大きな成果を収めている。

このような地域における投資活動は、コミュニティ活動やボランティア活動と対象や

内容が重複している面もあるので、他の活動の中に埋没して、見落とされてきた。しかし、その経営センスや地域経済に与える広範な波及効果などに着目して、「地域づくりビジネス」として積極的に位置づけるべきだと思う。

「地域づくりビジネス」の特色は、あくまで地域の住人である企業人が主導していることであり、自らの企業経営も含めて、地元における多様な雇用の創出が強く意識されていることである。その意味では、現在、一般的に推奨されているリストラなどの発想とは異なる。

また、「地域づくりビジネス」が、通常の企業活動と大きく異なるのは、積極的に地域の歴史や個性を掘り起こす姿勢が強く、地域の新しい生活様式を模索している点だろう。言い換えれば、「地域づくりビジネス」を他のビジネスから区別する重要な経営理念は、プライド・オブ・プレイス（その土地に対する誇り）とで

も呼べるものである。

* * *

地域づくりビジネスは、民間ではなく、市町村などの行政体为主导すべきであり、そのほうが「公共性」が確保されるという意味では本来的だという意見もある。

だが、この「公共性」というのがかなりうさん臭いことを私たちはすでに学んでしまった。「公共性」の名の下に、多くの土木工事がなされ、地域の共有財産である環境をいともたやすく破壊してきた。また、一過性ともいえる大型で豪華な公共施設の多くも、いまは膨大な維持管理の負担に苦しんでいるのが実情だ。つまり、公的資本形成などと麗々しく統計書に載っているが、内実は、不良資産が少なくないのである。

かつて、沖縄の町村で昔ながらの地域の集会所が取り壊されて、新しい公民館になった経緯を見聞したことがある。元の建物は、土地の風土に合った開放的な、どこからでも

出入りできる伝統様式であり、地域住民が共有していた。これが、クーラー付きのコンクリート建築にとって代わられ、入り口には、職務に熱心な管理人が配置された。

この時点から、建物は行政の管理下に置かれ、管理人は建物の忠実な番人になり、住民は施設を自分たちの共有物として扱う気持ちが萎えた。行政のシステムとは本来そういうものなのかもしれない。

したがって、愛媛県内子町や長野県飯田市などの、行政（職員）が中心となって進めている市街地再生の優れた取組みも、経営力のある地元民間人の登場や参画が最終的な成果を左右するに違いない。

* * *

来世紀も、地域に対する投資は、全体として巨大な規模で展開されていくだろう。それは官民を問わず、また民間資本も地元や域外を問わないだろう。しかし、地域にお金が投入されていけばよい、地域への投資は、行政が主導す

ればよい、という時代ではもはやないのではないか。

これは、途上国に対する日本の巨額の対外援助がその国の一般国民の暮らしの豊かさには必ずしも貢献してこなかったという事情に似通っている。

つまり、いま必要なことは、膨大な投資が、地域住民の生活の豊かさにとりわけ自立的に豊かさを創り出す力を培うことに、本当に貢献してきたのかどうかを、しっかりと吟味することだろう。

行政を含めて、地域を覆う旧来のシステムを見直すうえで、一見ささやかな「地域づくりビジネス」が重要な問題提起をしているように思う。

プロフィール

(もりと さとし)

・東京で「地域総合研究所」(CSK)を主宰。全国各地の地域づくりに参画する。

・各種審議会委員を務めるほか、論文等も多数。

—21世紀の地域づくりと “まちセン”—

H.11.2.25 まちセン運営委員会より

【出席運営委員】

- 讃岐 幸治
愛媛大学教育学部教授
- 村上 克美
松山大学経済学部教授
- 河野真紀子
(株)オフィスQ
- 守谷 和久
(株)都市計画研究所中・四国代表取締役
- 若松 進一
えひめニューフロンティアグループ代表

(村上) このまちづくり総合センターの設立が一九八六年というのを聞いて、ああそうだったなと思ったんですが、戦後の日本の経済成長が屈折した時期として、ふつう三つくらいあがるんです。最初が、一九七三年のオイル・ショック、次が八五年のプラザ合意、そしてマイナス成長になった九七〜九八年。

この三つの大きな転換期のうち、八十年代後半というのは、円高調整があつて、いわゆるバブル景気になって、特に若者が消費をリードしてきました。経済もグローバル化とか、ソフト化とか大きく変わってきた時代です。物の豊かさから心の豊かさと言われるように、多くの人が望むのは、精神的豊かさ、自由な時間、それから本当に気のおけない友人、知人といったもので、まさに遊び志向なんです。

大学の授業でも、おもしろければ聞いてやる、おもしろくなくても一所懸命やっていたら聞いてやるという感じになっていきます。来年度のセンターの事業のメインは、ホームページの開設とフェイス・トゥ・フェイス情報ということだと思うのですが、それはまさに時宜を得ていると思いますね。

生の情報も、自らアクセスするものというように、多様なものを用意していかないと、一つの方式だけではついてこない。そして、その背景には、遊び心といったものがないと、若者はノッてこないと思うんですね。(所長) たしかにこのセンター創設の頃の時代は、世相も上向きで、市町村の方もやんなきゃいけないという雰囲気があったと思うのですが、今はそういう意識が少し停滞しているような感じもします。また、まちセンには、志をもった人が集まるところというところがあつたんですが、そのメ

れている女性なども、横のつながりが難しかったりしてると思うんですが、まちセンでも、女性の力を集約する役割もあるのかなと思うんです。

（所長）まちづくりの世界で実際に下支えしているのは、女性の方が多いと思いますね。

（河野）女性というのは、一人で出るのはいやだけど、グループだと、例えば農産物の加工品の発表の場などには積極的に出られていますし、もう少し間口を広げる必要はあるのではないかと思います。

〈ホームページ〉

（讃岐）「to have+to be」と時代は動いているんですね。だから、マスからフェイス・トゥ・フェイスというコミュニケーションになってくる。住民の側からすると、出番のものすごく求めているんです。「私もおるんよ」という感じで。そうなると、センタも固定客だけでなく、どう人をさがして、そのさがした人をどうスターにするかというの

が大事になると思いますね。（所長）ニュー・フェイスですか？

（讃岐）こういう人も、こういう人もいるよという感じで引つ張ってきて、場合によっては、特派員的な機能を持たせるとおもしろいですね。

また、言葉遊びをする、モノづくりも物質的な物から人の者へと変わってきている。そこへ持っていくか、今の時代の時代は動けないようになると感じています。

市町村の広報紙コンクールでよく優秀賞をもらう伊予三島市なんて、住民の方をかたっぱしから出している。一回に何十人も。知ってる人が出るとみんな見ますよね。

ホームページにしても、首長さんが最初に出てきたんでは、まず見ないですよ。（笑）

（事務局）今イメージしているのは、先生がおっしゃった特派員に市町村のまちづくり担当者や活動者の方になっていただいて、そこから新しい情報をいただけるようなシス

テムにしたいと考えています。

（守谷）アクセス数をカウンとしてるところも多いですが、一年間で千以下で留まっているところが多いですね。私のところのホームページも半年で千を越えたんだけど、更新してなかったら、そこから増えない。だから、内容を更新しているかどうかのポイントだと思いますね。

まあこんな便利なものはないし、これからも増えると思いますけれど、ただ、あまりそれに寄りかかると、フェイス・トゥ・フェイスがおろそかになるから、相乗的に利用するというのが重要でしょうね。

（河野）俳句や川柳のホームページは、非常に人気があるようです。自分で投稿して参加できるし。

（守谷）参加型はいいですね。リンクを徹底的にはると、タコ足のように広がって、すごいネットワークになりますよ。

（若松）ホームページというのはどうなんだろう。今の情報化の時代にあって、タイム

リーだと思うし、むしろ遅れているくらいだけれども、私はあまり期待しすぎない方がいいように思う。

たしかにいいことというのはいっぱいあると思うんですけど「いいこと」と「できること」とは違うと思うんです。

センターでやることには限界があるのだから、集中的にやるというのが大事ではないかと思っていますね。

参加型もいいけど、集中して受ける人がいて、その人が高まらなければ、できないわけですから。

私たちのえひめ地域づくり研究会議では「始める活動、続ける活動、高める活動、やめる活動」ということでずっとやってきているわけですけど、一度総括して、やめるものはやめて、そしてまた始めたいと思いますね。

〈サロン機能の強化〉

（守谷）先ほど、ニュー・フェイスという言葉があって、ドキッとしたんですが、たし

かにニュー・フェイスが来ると、その会が違ってくるね。

来年度の事業計画でサロン機能の強化をあげられてますが、これは、ニュー・フェイスを檜舞台に上げるという意味でもいいと思います。ジャンルごとに分科会的にシンプアが集まると、新しい会社だって、できますしね。

(所長) 今ある「地域づくり研究サロン事業」とは別に、センターにもっといろんな人に来てもらうにはどうしたらいいかということと考えているんですが、果たしてお客さんが来るのか？という問題はあるんですね。

(若松) サロンということですが、実は双海町の私の家がまちセンの支所のようになっていて「煙会所」と名付けているんですが、年間千人くらいの人が出て来ます。ホームページの時代になっても、情報はやはり人なんです。

それから、先ほどから新しい人という話が出てますが、私は十年前の僕ではないと思

っています。十年の間にいろいろと積み重ねてきているわけですから、古いとは思ってません。いつまでも「若松」というくらいですから。(笑)

もちろん人が変わっていくのも大事なことです。三分の一くらいずつ変わっていくのがちょうどいいのじゃないかと思っています。

(讃岐) 私も昔このセンターの人たちと「サロン・ド・きぬた」というのをやっていて、その司杯任だったんですが、もっと気楽なものでないと、型にはめて拘束するようだと、人は集まらないと思います。(事務局) なんとなく人が集まるような雰囲気があればいいと思ってます。最初、コーヒーでも飲みにかけてみようかという感じがいいと思ってるんですが。

(若松) センターに人が来るというのは大事なことだと思うんです。市町村の人が来てワイワイガヤガヤ言ったり、活動している人が調べものをしたり、交流したり、そうい

う場ができたなら、それがサロンなんです。

講師の先生がいて生徒がいるという時代ではもはやないだろうと思うんですね。例えば、サロンをやるにしても、先生の方が十四、五人、人を連れて来る。それができないような人はアドバイザーにならない。そういうふうにする方がいいですよ。

(村上) 大学で市民講座をやっても、昔ほどはなかなか人が集まらない。そういう意味では、まちセンなんてよくやっている方だと思います。他の所なんて、動員をかけて人を集めているのに。

どんな社会が成長しているって、何をやってもみんなが喜んでくれる時代と違って、「明日は今日より豊かだ」というのが幻想になると、何もかも縮小していく。その中で、ある程度の固定客を持つているのは、相対的に見ればむしろ成長しているということになる。

そういう意味で、ドロ臭い

というか、地域と結びついていてという点は、これからの強さになるはず。今から、組織を広げるなんて、もうできません。現状を守ることが大事なのではないでしょうか。

(守谷) この数年間に全国的に活動者の交流組織ができてますが、成功した事例はあまり多くないですよ。

私は今、環境問題、特にリサイクルに興味をもってるんですが、「リサイクル市民の会」の吉田さんという方が、松山の堀之内でフリーマーケットを始められた。

もう五十回以上やられてると思うんですけど、毎回一万五千人を下らない人が集まって、エントリーが順番待ちの状態。あれを見て思うのは、楽しいしかけだと思えます。

〈まちセンの今後のあり方〉

(所長) 財団の運営も厳しくなってる。まちセンのあり方についても、いざれ話があるのではないかと予感してるんで

すが。

(讃岐) これからは社会経済研究財団とか生涯学習センターの郷土研究科あたりと連携して、理論と実践をつなぐ方向を模索する必要もあるでしょうね。

また、まちづくりの全体からすれば、まちづくりに関わる各機関や団体などのそれぞれが、どの部門や分野を担うのかはつきりさせて、それらが相互に連携協力していく、システムの考えていくことです。一か所だけですべてをやるといのは、何もかも中途半端になってしまう。スタッフにしても、お金の面からみても。そう思えるのですが。(若松) 去年やった事業で、僕は出席していないのだけど、行った人間が勉強になったと言ったのは、農業会議の21世紀えひめ村づくり推進協会ですか、あそこと連携してやったシンポジウム。

あれによって、まちセンが愛媛の農業問題なり、ムラ再生なりに関わられたということ

はよかったのではないかと思いますね。

ここは金がないことがネットワークになってますから、金がある所とどう連携するかということをもっと考える必要があると思いますね。これは、大事なことですよ。(笑)

(所長) あのシンポは、御膳立てというか、企画をこちらがやらせてもらったんですが。(若松) 昨日も話してたんですが、この一年間で全国で集落が五十いくつ消えたそうです。そして、これから五年間で二百五十くらい減るだろうという予測がある。

このように地域のムラ社会が消えていっている中で、地域の問題をもう一度学ぶ場として、まちセンというのはあってもいいのではないのでしょうか。

(村上) 今は、まちづくりをしようとしている市町村自体がアップアップしてるというか破綻寸前ですし、それを救うべき中央からの財政トランスファアーは、ゼロ。

過疎化の問題にしても、従来やれていたこともやれなくなっているのが現状ですから、市町村がどのように考えていったらいいのか、あり方も含めて考えていかなければいけない時期になってきた。

そういう意味で、まだホイホイやっていた一九八六年頃とは状況がまるつきり違うんです。まちセンの機能を強化する、あるいは組織を大きくする、という必要性はあっても、逆はないと思いますね。

(讃岐) 情報は、その字のごとく「情で報いる」という世界がかなりあるんですね。情というかハートのつながりを相当持っていないと、地域はバラバラになってしまう。

地域の問題を吸い上げるときに、「カラオケ型」をどう仕組むかというのがあるんですね。上から下に聴かせるのではなくて、ワアワア言うてきて「こういう問題があるけど、どないするん？」とか「うちはこうやってのり切ったんだよ」といったふうに出してい



運営委員会の様子

く世界をどうつくっていくか。それが、今の組織にはないんですね。そういう場づくりとか、方向づけも考えていただけばと思いますね。

(若松) 私が長く関わっている公民館の機能に「あつまる・まなぶ・つなぐ」というのがあるんですが、このセンターも似てるんですね。

こういう顔が見えてこない時代になればなるほど、集まるといふ機能は、大事にしていくべきだと思いますね。

学ぶという機能は、ここはいっぱいあります。つなぐという機能は、これからという装置をつくっていくかでしょうね。



イベント裏ばなし

『舞たうん』の創刊は、昭和62年10月15日。表紙は「んやわんや王国」主催の津島夏祭りの写真のようです。

「舞たうん」 還暦祝 表紙展 (1号～60号)

2号からは、当時のGALのまさに手づくりイラスト。初代の編集係は、田村さんと都築さんでした。(6号?まで) その次が、久保田さんと丹下さんですが、田村さんからお便りによると「久保田ひとみさん」結婚されて広島の方かなあ?」ということですが、丹下真澄さんについては、お母さんから「昨年八月から1年間、イタリアへ留学中」との連絡がありました。

お返事が大変おそくなり申し訳ありません。二月三月はアツという間に過ぎてしまい、また私事ではありますが、バタバタしておりました。かつて、自分も関わっていたものの、原稿の依頼、また、編集・構成の大変さはわかってはいたのですが、連絡がおそくなりました。

ただ、毎回届けられる『舞たうん』は、私にとっては楽しみの一つであることは、わかってはいたみたいです。

現在の仕事は、まちづくり時代のような「人と接し、語り、考えて行く」こととは、ちよつとちがいますが、当時いろいろな形で知り合った人達の考え方・生き方は、私の財産となっております。

また、パソコン通信ECC C (TOWN・TOWN「喫茶たうん」等) で知り合った人達とは、いまだになんらかの形で付き合いがあります。

(田村純子)

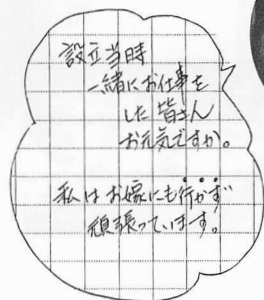


『舞たうん』が届くのを、毎回来しみにしております。私は、設立時の昭和六十一年七月から二年間、まちづくり総合センターでお世話になりました。

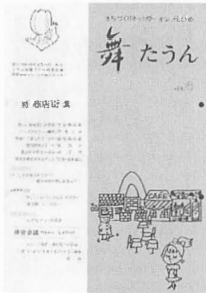
今ふり返りますと、まちゼンを通して、愛媛の魅力を再発見し、人と人との繋がりの大切さを学ぶことが出来たと思います。

現在は、歯科衛生士というまちづくりとはあまり関係のない仕事に携わっておりますが、まずは身近なところからまちづくり活動に参加したいと思っております。

(都築京子)

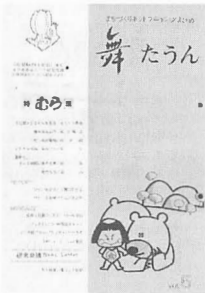


第6号 (S.63.8)



商店街

第5号 (S.63.6)



むら

第4号 (S.63.4)



五感のまちづくり

第3号 (S.63.2)



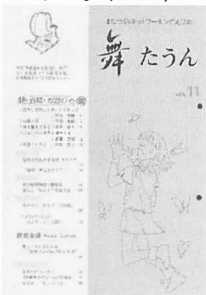
農業・むら特集

第2号 (S.62.12)



美しい環境で暮らしたい

第11号 (H.1.6)



地域・かわり

第10号 (H.1.4)



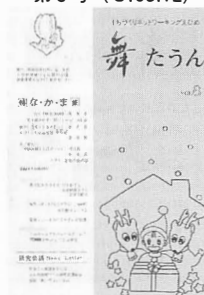
くらしの風景

第9号 (H.1.2)



交流

第8号 (S.63.12)



な・か・ま

第7号 (S.63.10)



花みち

第16号 (H.2.4)



暮らしからの地域賛歌

第15号 (H.2.2)



明日の暮らし創造

第14号 (H.1.12)

明日のまちづくり
—子供たちとともに—

第13号 (H.1.10)

地域の暮らし
“生産と流通”

第12号 (H.1.8)



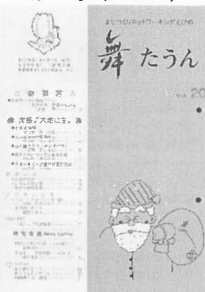
海外の旅から

第21号 (H.3.2)



集落づくり未来戦略

第20号 (H.2.12)



実感！大地に生。

第19号 (H.2.10)

地域と二人三脚
“青年団”

第18号 (H.2.8)



五感とやすらぎ

第17号 (H.2.6)



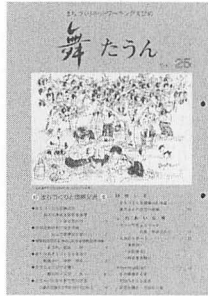
島でイキイキ！

第26号 (H.3.12)



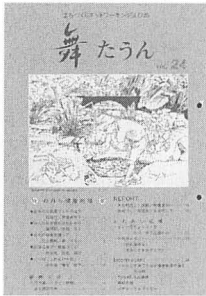
EVENT サイコウ

第25号 (H.3.10)



まちづくりと国際交流

第24号 (H.3.8)



われら健康地域

第23号 (H.3.6)



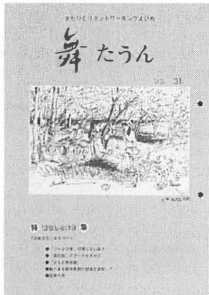
地域づくり、わたしの役割

第22号 (H.3.4)



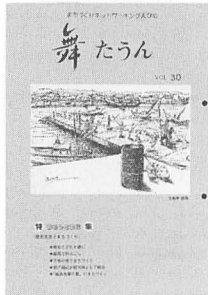
夢はふくらむ

第31号 (H.4.10)



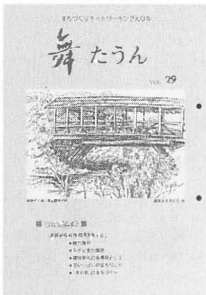
暮らしと文化
「芸術文化とまちづくり」

第30号 (H.4.8)



暮らしと文化
「歴史文化とまちづくり」

第29号 (H.4.6)



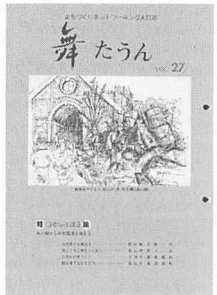
暮らしと環境
「美観から社会環境を考える」

第28号 (H.4.4)



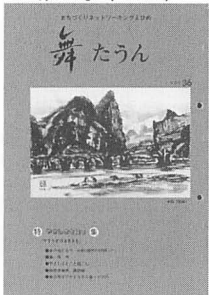
暮らしと環境
「ゴミと雑排水から生活環境を考える」

第27号 (H.4.2)



暮らしと環境
「水と緑から自然環境を考える」

第36号 (H.5.8)



やさしさを探る
「やすらぎのあるまち」

第35号 (H.5.6)



交流
「国際交流」

第34号 (H.5.4)



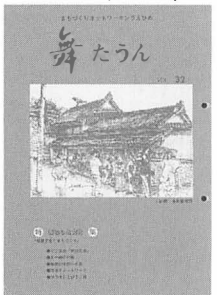
交流
「人 ふれあいを求めて」

第33号 (H.5.2)



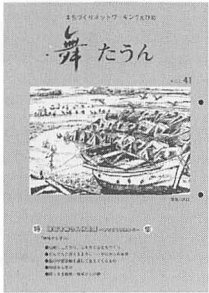
交流
「地域 新たな展開を求めて」

第32号 (H.4.12)



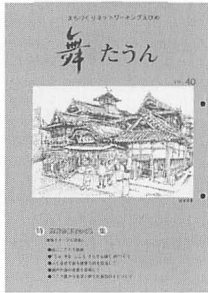
暮らしと文化
「伝統文化とまちづくり」

第41号 (H.6.7)



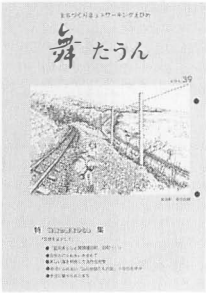
地域を担う人材育成
「まちづくり塾からー
「地域から学ぶ」

第40号 (H.6.4)



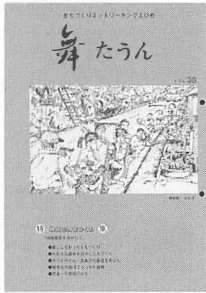
地域の顔をつくる
「地域イメージの創出」

第39号 (H.6.2)



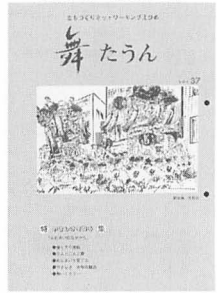
地域の顔をつくる
「自然を活かして」

第38号 (H.5.12)



地域の顔をつくる
「地域資源を活かして」

第37号 (H.5.10)



やさしさを探る
「ふれあいのなかから」

第46号 (H.7.10)



長寿社会
—真の豊かさを求めて—
地域を支えるネットワーク

第45号 (H.7.7)



長寿社会
—真の豊かさを求めて—
地域を拓く若者たち

第44号 (H.7.4)



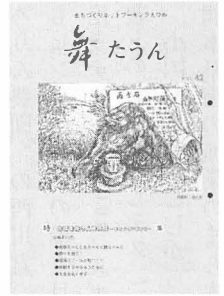
長寿社会
—真の豊かさを求めて—
私と地域とのかかわり—生い関役—

第43号 (H.7.1)



地域を担う人材育成
—まちづくり塾から—
「まちづくりネットワーク」

第42号 (H.6.10)



地域を担う人材育成
—まちづくり塾から—
「心地よい汗」

第51号 (H.9.3)



パートナーシップのまちづくり
—若者グループの活動から—

第50号 (H.8.12)



町愛媛県まちづくり総合センター
設立10周年記念

第49号 (H.8.7)



パートナーシップのまちづくり
—女性グループの活動から—

第48号 (H.8.4)



パートナーシップのまちづくり
—まちづくりグループの活動から—

第47号 (H.8.1)



長寿社会—真の豊かさを求めて—
交流広場

第56号 (H.10.4)



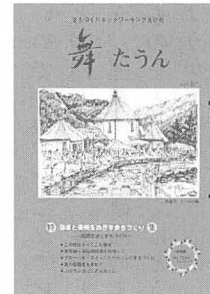
ローカルに生きる
—地域の足下を見つめて—

第55号 (H.10.1)



交流と連携をめざすまちづくり
—地域資源を活かしたまちづくり—

第54号 (H.9.10)



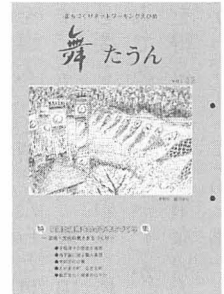
交流と連携をめざすまちづくり
—国際交流とまちづくり—

第53号 (H.9.7)



交流と連携をめざすまちづくり
—おもしろ・こだわり・夢イベント—

第52号 (H.9.4)



交流と連携をめざすまちづくり
—芸術・文化の薫るまちづくり—

第60号 (H.11.4)



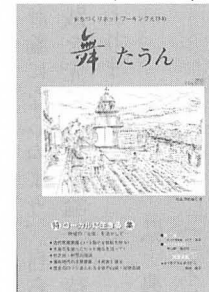
1999 時代が変わる
何かが芽生える
—住民主体の地域づくりの胎動—

第59号 (H.11.1)



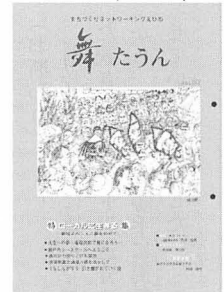
ローカルに生きる
—地域を拓く人々—

第58号 (H.10.10)



ローカルに生きる
—地域の「お宝」を活かして—

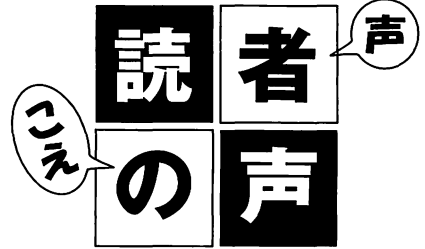
第57号 (H.10.7)



ローカルに生きる
—地域イベントに夢をのせて—

舞たうん
そして
My Townは
永遠に
不滅であって
ほしいものです。

舞たうん



のまちおこしに精を出しています。行止りのまちの仕掛けが、ことごとくヒットして三年目を歩いています。

山田 大蔵さん
(熊本県牛深市)

あなたのまち わたしのまち
マイタウン 舞たうん
毎回楽しく拝読しております。
そろそろ『舞たうん』が来る頃となると青春時代に戻ります。彼女を待つような気持ちで待っているのです。(わあーバー。でも本当！)

いつも送っていただきありがとうございます。広報誌は活動するものには、不可欠のツールですが読者にとっては「ヒマつぶし」程度のもので、そのギャップが編集者の悩み。でも今号のように西川さんや野田さんの文章をたまたま読んで、勇気づけられることもありませうので、要は見映えより中身。ネタが良ければ、少々腕が悪くてもおいしくいただけます。(失礼)

赤須 治郎さん
(石川県金沢市)

今59号1ページ目に小さな国バツテン大きな夢に向かい歩いている私の古里熊本県北「小国」の坂本善三美術館。そして、久しぶりに出会った「ちろりん農園」の西川君。いつもヒント山積み歩きの目德斯足ラテス直司Chan。(ボクの親友の名前と同じデス。)

いつも情報ありがとうございます。全体的に情報豊富、役立ちます。今後ともよろしお願いいたします。

今 中 孝 介さん
(兵庫県加美町)

小国のまちおこしから離れ、熊本県南の漁業のまち牛深市

今年は、全国塾長サミット

あるんでしょうか？

あればお会いしましょう。

西村 弘毅さん
(兵庫県関宮町)

細かな取材と肩のこらない文体で、自分がレポートしてきた様な疑似体験を楽しませていただいております。

中村 賀久さん
(岐阜県揖斐川町)

非常に親しみやすくていいのですが、どこかでピリッと辛口というか、硬派というか、連載で基礎研修のようなものを入れられてはどうでしょうか。

荒川 俊雄さん
(大阪府寝屋川市)

人の顔、生活ぶりが見える記事を多くしたと思います。そして、街(V町)と田舎の相互の交流ぶりを考える視点を導入して頂けたらと思います。なぜなら今、最も田舎を必要としているのは、松山の人であり街の中でしか「場」を得ることが出来ない人々だからです。(この「場」とは仕

事の場、生活の場を含む人生の「場」です。)

塩次 喜代明さん
(福岡市)

地域の郷土料理のつくり方を紹介してほしい。

大野 尚子さん
(松山市)

特集を県内に限らず、時にはもっと広くとらえにくいテーマでもいいから、様々な人々の生き方に視点を置いた編集もあってはいいのではないでしょうか。

それから大変でしょうが、地域人との交流を深めてほしいと思います。足の動かない評論にならぬよう、自らの実践を先にした評論を期待しております。

尾崎 弘典さん
(一本松町)

(お断わり)
前号(59号)に挟んでおいた読者アンケート返送分の中から、抜粋して勝手に掲載させていただきます。

— 研究員レポート —

宮崎県田野町で学んだ

特産品と地域づくり



研究員 小川 龍児

誇っており、特に特産品である漬物用干し大根の生産量は、年間約一万二千tで、日本一ということであった。

田畑に竹で組んだ櫓をつくり大根を掛ける「大根干櫓」は、冬の風物詩となっており、鰯塚山から吹き下ろす寒風に大根を晒して天日乾燥すると、あの歯切れの良い沢庵となる。東京にもアンテナショップを設置し、常に消費者の嗜好動向の把握を怠らず、その結果、全国から注文が殺到しているということであった。

* * *

さる一月二九日から三十日にかけて、地域づくり団体全国協議会主催の『第十回地域づくり団体全国研修交流会宮崎大会』が「想いはひとつふるさと夢限大」をテーマに、宮崎県内十一会場で開かれた。

私が分散研修会に参加した田野町は、宮崎市から車で三十分の所に位置する、人口一万千余人の緑豊かな都市近郊の町であるが、農家一戸当たりの生産額が宮崎県で一位を

供に夢を与えるようなイベントの企画からスタートした。

役場玄関前の銀杏に電飾を施したり、町内を花一杯にする運動やクリスマス・イベントなど、たのしい田野町“づくりに取り組まれているが、自分達は果たしてまちづくりに役立っているのか？ 他にもやれる事はないのか？ 等々悩みは尽きないようであった。

* * *

分散会では『特産品と地域づくり』を研修テーマに、全国各地からの参加者二十余名と『このゆびとまれ』会員との意見交換が行われた。

共通意見としては、安定供給体制と販路の拡充に苦労している点であったが、経験談として「特産品であっても“商品”でないと売れない」「情報化時代でも人との繋がりが役立つ」「自分の町にない物でも、工夫により特産品となり得る」等があげられた。

参加者の中には、わが町自慢をする者、何も無いと悩む

人様々であったが、それぞれの町への想いを胸に集まっていたように思う。

翌二日目は、シーガイアにて全体会があり、各分散研修会の報告のあと閉会となった。

* * *

研修会に参加して感じたことであるが、各人が暮らしている地域で「何が出来るか！何をすべきか！」と様々な熱い意見が飛び交う中で、はっきりとした“答え”を導き出すのは難しいこと、否、出ないかもしれない。

しかし、こだわりと信念を持って活動している人々の多いことに改めて驚いた。そういう人々と関わるためには、積極的に話をしたり意見を述べたりしなければ、出会いはないのだということを強く感じた二日間であった。

今回は岩手県で、その次は高知県で開催予定だそうですので、皆さんも参加されてみてはいかがでしょうか。



— 研究員卒業レポート — 夢はさりげなく したたかに

前研究員 伊手 博志
(津島町)

日頃の事務処理とは違った世界、まちセンでの生活が終りを迎える。二年というのは早いもので、アツという間に経ったような気がする。今思うと、もっとやっておく事があったように感じながらも、卒業にあたって、頭の中を少し整理してみたいと思う。

永遠のテーマ

“地域づくり”って何だろう、ありきたりな問いかけに、今になってさえ明確な答えは持てていない。永遠のテーマと言われながら、何が必要とされ、どんなふうに取り組んでいくものだろうか。

まちセンでの第一歩は、実践者と会い、触れ合うことから始まった。地域づくりに携わっている人にはとにかく元気な人が多い。こだわりを持ち、人を引き付ける魅力に溢れている。そういう人と接しながら、自分が何をどう感じているのか、その経験がまず求められたように思う。

また、地域づくりの世界では、“地域づくりは人づくり、人づくりは自分づくり”という言葉がよく聞かれる。人が働きかけることから地域がつくられるように、自分がまず動くことでまわりにも影響を与え、それが地域を変えるきっかけや力になったりする。

他人任せになったり、依存ばかりすることのないよう気をつけなければいけない。

そして、変えてはいけないものを変えてしまわない大切さ。その見極めを自分自身がしっかりとやっていくことが、何より求められているように思う。その基本の部分があってこそ、自分なりの夢やビジョンを地域に描いていくことが出来るような気がする。

地域づくりにはマニュアルのようなものがない。その中で先進地の事例などがよく参考になれる。そこからヒントを見つけ出し、吸収しながら、自分の住んでいる地域なりの姿をつくっていく。その過程で、楽しみながら関わっていくことは可能だろうか。自分が楽しくなければ人に呼びかけることは出来ないし、まわりも楽しいと感じられない。苦しみからはよい地域は生まれないように思う。

結局、地域づくりにどう取り組むかというのは、自分が

地域でどう生きていくかという生き方そのものが問われているような気がする。

過疎というけれど

相変わらず過疎化の問題が声高に言われている。特に農山村においては、集落崩壊の危機が懸念されるほど深刻である。その解決を目指し、地域の経済性を高めたり、住環境や教育、福祉面を充実させるなど、様々な施策が取り組まれている。

センターに在る間に、県内外の先進地と言われるところを訪れる機会が何度あった。熱心な取り組みによって知名度が上がり、イメージアップや活性化、意識改革の面でも大きな成果が見受けられた。その多くは、地域が成り立たなくなるかもしれないという危機感を動機として、真剣に地域づくりを考え始めているようであった。しかし、そういう地域においても、過疎化は進行している。

ところでここ最近、田舎暮らしに憧れる人が増えており、実際に移り住む人も現われてきた。この流れにどう対応していけばいいのだろうか。全国には多くのまちがあり魅力的な地域は多い。その中で個性を際立たせ、地域の魅力を培っていくことがまず求められると思う。自分たちの地域に誇りを持ち、前向きに取り組んでいくことが、自然と流れを引き寄せることに繋がっていく。それは結局、自分たちが住みやすい地域をつくっていくことにもなると思う。

その結果、定住に結びつかなかったとしても、地域に与える強力な応援団が生まれることになる。

出ていく人を仕方のないことと思う一方で、来る人を暖かく迎える、そんな地域づくりも一つのあり様として考えられるのではないだろうか。

田舎の存在価値

田舎には、本来、都市と違

った存在価値がある。そして、都市に迎合しない地域づくりが求められる。

かつて、地域では、子供や年寄りなどそれぞれが役割を担っていた。そして、それを果たすことで成り立っていたように思う。

産業においても、農林水産商工などすべてをトータルに考え、地域でどうとらえていくかが問題とされる。産業がひとつなくなっても地域に影響があり、集落そのものの存在が懸念されるようになる。

そういうことも含め、田舎で生きることの価値を再評価してみる必要があるのではないだろうか。その見直し作業の中から地域で生きる誇りも生まれて来るような気がする。

そして、行政職員には、都市や若者文化を理解し、農村の良さも把握出来るような能力が求められていると思う。一方的な都市の物真似や、情報を受け止めるだけでは、自ら考えることを放棄すること

になる。前向きな発想も育たないし、見せかけの情報に振り回されてしまう。創造的な発想も、豊かな自然の中で生活することから育まれるのではないだろうか。

おわりからの始まり

とにかく、刺激的な二年間を与えてもらったことに感謝している。毎日が新しい発見や出会いの繰り返しであった。離れたところから我が町を感じるものが出来たし、自分というものを見つめ直す良い機会にもなったと思う。

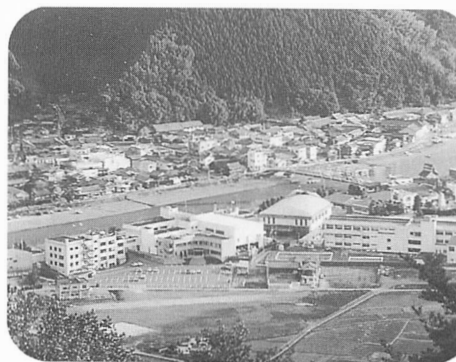
そして、研究会議の事務局を担当。この人テレビで見たことある、といったミスターな感覚は吹き飛び、その考え方や実践力には圧倒されることが多かった。地域づくりに対する自分の意識の低さも思い知らされたような気がする。

これからは国際的な視点も必要になって来るだろうし、求められるリーダー像も、自ら率先して行動をおこすこと

にあると思う。

ただ、何を目的とし、何をやるにしても、結局は自分の原点や尺度でものごとを考えていくしかない。そして、その自分をつくっていくのは、自分自身の意識の持ち方次第ではないだろうか。

この四月から、我が町で仕事をしている。どの部署にしよう、それが地域づくりに繋がっているという意識を常に持ち、これからの歩んでいきたいと思う。そして、わずかでも地域に貢献することが出来れば、今までお世話になった方々に少しでも恩返ししたことになるのではと、自分勝手に考えている。



恵み豊かな岩松川

“MY TOWN,” うおっちゃんく 歩キ目デス & 足ラテス



第七弾

岡崎 直司

実践ウオッチング ”五十崎町篇“

二月のある日、五十崎町をウォッチングする機会があった。生憎の小雪混じりの日だったが、南予方面から見て、「そうはイカ崎、内子の手前」という言い方があるから、多少の思惑ハズレは致し方無い。

天候はともかく、地元商工会の方々を中心に十数名で元気にウォッチング・ウォークを楽しんだ。

キヨロキヨロ、プラーリプラーリ。これが目玉の散歩における基本動作である。慣れない面々からすれば戸惑いは隠せない。普段の歩くスピードに較べると矢鱈に遅い訳で、せっかちなタイプにはイライラが生じるかも知れない。周囲の状況はともかく、当方としては自分の世界に入っていくしかありません。以下二時間余り、その道中で見つけたいくつかをお届けしよう。

まずは、屋根の上に注目！

①子細に見れば、大黒頭巾を目深にかぶり、定番の布袋を肩にかけ頭ほどもある打出の小槌を右手に持って、ドツカと米俵の上に腰を据えておられる。前だれには宝珠のマーク入り、足の合わせが尋常ではない。律儀にこれからも

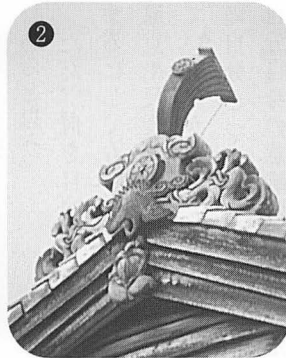
この家を守ってくれそうではないか。

②喜多郡を中心に帆かけタイプの棟瓦が多く分布する。風をはらみ、宝船を連想する帆は吉祥の表れである。家紋は「剣かたばみ」、三つ葉のクロバーに剣をアレンジしてある。帆にまでデザインされている。帆には妻押さえとしての鶴と亀。通常は反対側の妻にあつて一対の鶴亀とするから、何かの理由で寂しくなった亀が愛する鶴の元へはい寄つて来たのかも知れない。メデタシ、目出度し。

③コレは異なるもの。寿という字を誰かがしっかりと抱えておる。一体このオッサンは誰だ。片や下方では龍らしきものが火炎を吹いている。これが亀なら映画も真つ青の「ガメラ怒る」の図だがそれは無いだろう。後方は財のシンボル、宝珠。



ナゾの“寿”と宝珠



帆かけ舟を家紋に鶴亀



大黒様の飾り瓦



さて、上ばかり見ている訳じゃない。次なるは路上の物件。植木鉢篇より。

④ 竹製手づくり

これは大真面目。まちづくりの一環でキンと作りました。冷たいコンクリートの質感を和らげてくれます。ほつ。

⑤ 灯油缶

取り敢えず使えます。

⑥ 火鉢

第二の人生も未だ花咲かず、という所か。

⑦ 錬炭火鉢

平成十一年の現時点で、コレが解る人と解らない人は、一体何歳位で分かれるのだろう。各職場の昼休みの話題に提供します。世代間ギャップの、ある種モノ差しか？

⑧ 美的石臼物件

これはチョイ説明が必要です。餅付き用の石臼に似てますがさにあらず。下側に穴が空いています。ここは今でも精米所になっています、どうやら米つき用のひき臼らしい。やがて使用されなくなつてご覧の余生。左側陶器製のものも戦前期のものらしい。ヤマグチケン・サノの銘が右書きで刻印され

ていた。

お次はフェース・ハンテイング。

⑨ 子供のいたずらか、可哀想に折角のサボテンが泣いていた。

⑩ 下目づかいに口笛を吹いている、...と見えたんだからしょうがない。

⑪ 火星人ボーボアール

町商工会の参加者の方が見つけてくれました。さあ、こうなると次の刈り込みが難しい。

さて、刈り込みと言え、これを是非とも紹介したい。

⑫ こんな生け垣のことを、カッコイイと言う。

⑬ ⑭ 旧平岡駐在所

現在は使われていないが、洗い出し装飾によるメダリオンがアクセントになった凝洋風建築。窓の上の台形部分も西欧の石造り建築を模したキーストーン（要石）に他ならない。こうした建物が何かに活用される時、まちは輝くに違いない。

⑮ 最後に明治二十七年ごろに建築された庄屋栗田邸を遠くに拝見して、五十崎ウオッチイニングを終わろう。

尚、紙面の都合で割愛した物件数が多かった事を付記しておきたい。



海の水軍ネットワーク

のろし 狼煙リレー

北条を愛する会

菅 泰晴

(北条市)

瀬戸内海は古
代より、人、物、
文化、情報の大
動脈として、日
本の政治、経済、
文化の主要舞台
であり続けた地域であります。
特に五月一日に開通する「瀬
戸内しまなみ海道」は、瀬戸
内の中央部に位置し、大きな
島々が所狭しと集中する地域
であり、古代より漁業、製塩、
海運等が発達し、海に生きる
「海民」が成長した地域でもあ
ります。

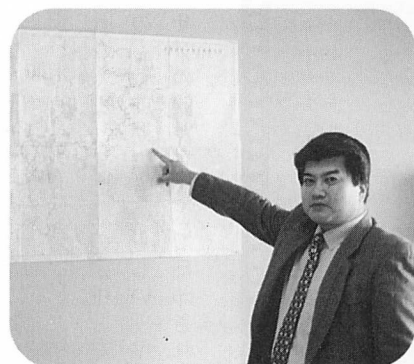
中世になると、この海の民
が武士化し、「海の領主」とも
いえる水軍（海賊）衆が、一
族的な連係を持ち、種々の情
報ネットワークを構築し、瀬
戸内における東西、南北の海
上ルートを支配しておりました。
その代表的な水軍の一つ
が、伊予の守護職も務めた河
野氏が率いた河野水軍であり、
中世中期以降その中核となっ
たのが三島村上水軍（能島、
来島、因島）であります。

これらの水軍のネットワー
クの主要な媒体の一つが「狼
煙」であり、今回の「しまな
み海道」開通にあわせて、関
係地域の「まちおこし」の一
環として、これら河野氏関連
の水軍の本拠地及び城塞を舞
台として企画しました。

「しまなみ海道」関係地域
には、歴史的に有名なところ
がたくさんあります。ただ、
これらは、その地域の方々は
よく知っていますが、一步外
に出ると知られていない所が
多いようです。したがってこ
の機会に全体として歴史的に
横のつながりをもって眺めて
見ますと、理解がしやすいと
思います。狼煙
は、ただの単純
な一すじのけむ
りではありません
が、この狼煙を
あげて継いでい
くことが、地域
間の交流を深め
るとともに一体
感が持てたらと
思いました。

今回のイベン
トのご協力のお
願いに各関係地
域の方と何回かお会いしまし
たが、どこも皆快諾をしてい
ただきました。本当にありが
たいことだと思えますし、勉
強になりました。自分の郷土
に誇りをもって町おこしを真
剣にされている方々が多く、
私どももエネルギーを分けて
いただきました。

私ども「北条を愛する会」
は小さな会でございますが、
関連地域全体がよくなること
を願っております。



狼煙上げに御協力いただける所

- ① 鯨ヶ頭山 (大三島町)
- ② 古島山 (上浦町)
- ③ 開城山 (伯方町)
- ④ 能島山 (宮窪町)
- ⑤ 念仏山 (宮窪町)
- ⑥ 龜老山 (吉海町)
- ⑦ 来島山城 (今治市)
- ⑧ 海島山城 (波方町)
- ⑨ 怪島山城 (大西町)
- ⑩ 十文字城 (玉川町)
- ⑪ 廣々森城 (菊間町)
- ⑫ 高山山城 (北条市)
- ⑬ 徳島山城 (北条市)
- ⑭ 高島山城 (北条市)
- ⑮ 瀬戸風崎 (松山市)
- ⑯ 道後落城 (松山市)
- ⑰ 明沢城 (興々島)
- ⑱ 泰明城 (中島町)



(P.S) 狼煙は、5月3日午後大山祇神社出発予定です。

笑顔を運ぶトイマップ

しまなみトイマップ
制作グループ代表

中野 和美
(伯方町)

場が生まれたいのに。大勢の人の手が集まっていた。勢の人の手が集まっていた。勢の人の手が集まっていた。

「岩城村はこの布の地図を作っているんですよ。」「えー、いいね。楽しそうね。」「ということで伯方も制作にとりかかりました。この楽しいという気持ちがとても大事なことだと思いました。それから生名、佐島を制作してゆきました。

お互い作っている人とのご対面。ボランティアについてお話ししたり、子育てについて、高齢化について、今まで、会う機会の無かった人達が、この布の地図のおかげで出会え

たのです。それも素敵な出会いです。

島内においては、島の昔話、産業のおこり、環境についてとか、制作しながら、いろいろなことを知ることによって島を愛する気持ちが一層深まりました。地図にふれることによってこんなに素直になれるなんて。瀬戸内しまなみ海道沿線に地域を愛する人達によって布の地図ができたらと夢のようなことを思いました。

現実問題として、地域住民は橋がかかることで浮かれてばかりではありません。海上交通の便が悪くなったり、治安が悪くなるのではと、いろいろと不安を抱えております。

島と島とは橋で支えますが、その支えられない部分を人と人が語り合うことによってつながればと、第一回しまなみトイマップ制作連絡会が、昨年八月に発足しました。

それから何回か交流会を実施してゆくことに参加数が増えてゆきつつあります。その

度にいろいろな人に出会いました。その地域地域のカラーを出して、トイマップが本当に尾道から今治まで、できつつあります。

しまなみ海道の開通時に、トイマップが一堂に集まった時にそれぞれのマップがメロディを奏で、大演奏会になるのでは。今、プログラムを作りながらドキドキして幕開けを待っています。



第1回しまなみトイマップ制作連絡会の時の様子

(P.S) 5月～10月にかけてトイマップキャラバン隊が今治から橋つたいに尾道まで毎月移動していきます。

布で作ったおもちゃを媒介にして、三世代が楽しく集まって遊んでいる場所が、弓削にあるというので、私達は心弾ませて出かけることにしました。

おばあちゃん、お母さん、子供達。おもちゃを縫ったり、布絵本を開いたり閉じたり、そして布の地図の上で遊んでいました。子供とおばあちゃん、お母さんがいっしょで可愛いかったです。これは地域の宝ですよ。伯方にもこういう



伯方トイマップ制作グループ 左上が中野さん

● 媛のくにフラッシュ ●

尾道市 ○

開通にあわせ 続々オープン



瀬戸田町

因島市

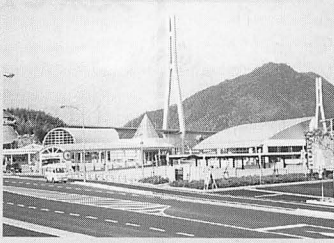
■多々羅リゾートパーク・
しまなみ村会場

伯方町

★オープン(予定)施設

■しまなみ海道'99
常設会場

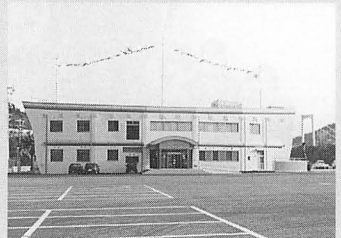
② 多々羅しまなみ公園 (上浦町)



世界最長の斜張橋・多々羅大橋のたもとに「多々羅しまなみ公園」が四月二日オープンしました。
特産品センターのほか、レストラン、観光情報センター等があり、レンタサイクルも利用できます。
隣に「しまなみ海道'99」会場の多々羅リゾートしまなみ村があり、死海体験のできる「うきうきプール」等で楽しめます。坂を登ると、地元出身の書道家・村上三島氏の作品等を展示する「村上三島記念館」があります。
☎午前八時三〇分～午後五時
☎無休
☎(〇八九七) 八七一三八五五

伯方島ICからすぐの伯方S・Cパーク内に、船の形をデザインした「マリノアシス」はかた」が四月八日にオープンしました。
一階の特産品売場では、伯方の新鮮な農産物やお土産がすべて揃い、二階は新鮮な魚介をメインにした料理が味わえるレストランになっています。
また、施設の横には伯方・大島大橋を眺めながら海水浴が楽しめるビーチを整備しています。今夏オープン予定。
☎午前九時～午後六時
休月曜日
☎(〇八九七) 七二二三〇〇

③ マリノアシスはかた (伯方町)



④ ローズ館

(吉海町)



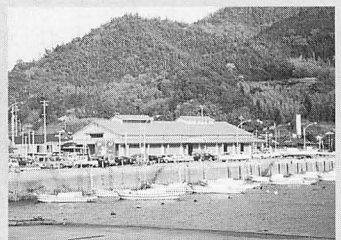
世界中のバラの花約十万本が集められている吉海町バラ公園の隣に「ローズ館」が四月十八日オープン予定です。バラのポプリやじやこ天などを販売するほか、軽食喫茶ができます。
隣の郷土文化センターには、地元出身の野間仁根画伯の作品等が展示されています。
また、五月十六日から一週間「世界バラ展」が開催されます。
☎午前十時～午後七時
☎無休
☎(〇八九七) 八四一二九七〇

⑦ 道の駅 今治湯ノ浦温泉 (今治市)



⑤ いきいき館

(吉海町)



来島海峡大橋の大島側の付け根下田水港内に、吉海町物産市場「いきいき館」が四月十八日オープン予定です。
地元でとれたての新鮮な魚や野菜・果物から海苔等の海産加工品を揃えた販売コーナーのほか、来島海峡の眺めを味わいながら、新鮮な魚や野菜をパベキューで食べられるレストランも併設されています。
付近が「しまなみ海道'99」の常設会場になります。
☎売店：午前九時～午後五時
レストラン：午前十時～午後八時
☎無休
☎(〇八九七) 八四一三七二〇

しまなみ海道 交流拠点施設

①しまなみの駅 しまみ御島 (大三島町)



大山祇神社の手前左手に、「しまなみの駅 御島」が四月四日にオープンしました。
特産品の展示販売コーナーや観光情報コーナーのほか新鮮な農産物や魚介類も販売しています。
また、自転車で島を巡る人のためのシャワー室や仮眠室、自転車修理施設が整備されていて大三島の新しい観光拠点になっています。
近くに、大三島藤公園や大三島美術館もあります。
☎午前八時三〇分～午後五時
休無休
☎(〇八九七) 八二一〇〇二

⑥今治サイクリングターミナル サンライズ糸山 (今治市)



世界初の三連吊橋、来島海峡大橋のたもとに、愛媛県初のサイクリングターミナル「サンライズ糸山」が四月二十日にオープンします。
しまなみ海道を自転車や歩いて渡る人の観光拠点として、レストランや宿泊施設、レンタサイクルが整備されています。現在、宿泊予約受付中です。付近が「しまなみ海道99」の常設会場となります。
☎午前七時～午後九時
休無休
☎(〇八九八) 四一三一九六

⑧玉川湖畔の里 (玉川町)



しまなみ海道から松山に向かう国道三一七号沿いの玉川ダム湖畔に「玉川湖畔の里」が、四月二日オープンしました。
特産品販売所や調理室、伝統工芸品創作室などが整備されています。
玉川ダム湖畔は、桜や紅葉の名所で、近くには、四季の花が楽しめる「玉川ビュースパーク」もあります。
☎午前九時～午後五時
休月曜日
☎(〇八九八) 五五三〇九二



湯ノ浦温泉入口に、道の駅「今治湯ノ浦温泉」が四月十七日にオープンします。
特産品コーナーや観光情報コーナーがあり、レストランも併設されています。
また、百円温泉の温泉スタンドやレンタサイクルも整備しています。
☎物産館…午前九時～午後九時
レストラン…
午前十時三〇分～午後九時
休無休
☎(〇八九八) 四七〇九九〇

しまなみ海道 '99

5月1日、本州四国連絡道路 今治～尾道ルート(愛称「瀬戸内しまなみ海道」)が開通し、完成記念イベント「しまなみ海道 '99」が、愛媛・広島両県で開催されます。

- 期 間 平成11年春から秋
5月1日(土)オープニングイベント
10月17日(日)クロージングイベント
- 会 場 ・今治みなと会場(今治港)
・糸山ゾーン
・瀬戸内市場(下田水港)
・多々羅リゾートパーク・しまなみ村
・因島アメニティ公園会場
・尾道拠点会場
の常設会場のほか周辺地域各所

- 主なイベント しまなみ海道には、3本の本四連絡橋の中で、唯一自転車歩行者道が併設されており、それを利用して
- 瀬戸内海を[歩いて/自転車で]渡ろう
 - ツール・ド・しまなみ
 - 地球を歩こう・歩け歩け世界大会
- などのイベントが、
また、地域の歴史、文化、自然などの資源を活かした
- 水軍歴史絵巻
 - 1島3味まつりなど1,000を超えるイベントが開催されます。

- 詳しくは ☎089-913-5577
愛媛県しまなみ海道'99イベント委員会まで



¥1,000円(税別)書店、コンビニで販売中

瀬戸内しまなみ大学 開学

しまなみ海道周辺20市町村をキャンパスに、瀬戸内の歴史や文化、風土を生かした学部・学科で、学び、体験するのが「瀬戸内しまなみ大学」。

学長には、平山郁夫・前東京芸術大学長を迎え、さる3月21日に開学しました。

- 詳しくは ☎0848-25-7312
瀬戸内しまなみ大学事務局
(尾道市企画室)
<http://univ.shimamami.or.jp/>
または
今治市企画調整課、
越智郡各町村企画担当課

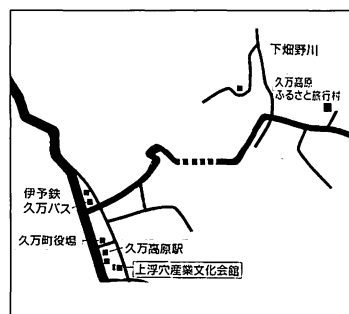
瀬戸内しまなみ大学 SETOUCHI SHIMANAMI UNIVERSITY



「久万高原テレワークイベント '99」

コンピュータの普及により、ホームオフィスなど時間や場所にとらわれないワークスタイルとしてのテレワークが最近注目されていますが、テレワークを活用した地域振興、雇用の創出など新しい地域づくりとその可能性について、多くの人に知っていただくためのイベントが、県内先進地である久万町で開催されます。

- 日時・場所 平成11年5月14日(金)～15日(土)
上浮穴産業文化会館ほか
- プログラム (予定)
13:30～W.A.スピックス城西国際大専任講師、
竹田義行四国電気通信監理局長の講演
事例発表(～16:30)
17:30～情報交流会
翌日午前中・電子メール体験講座
・メールリングリスト活用講座

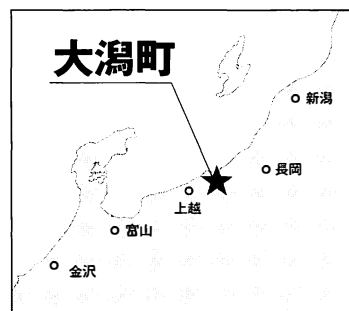


- 申込み問い合わせ ☎0892-21-1111 久万町役場商工観光課(宇都宮栄一さん)

第3回わくわくワークショップ全国交流会 イン にいがた

「参加型まちづくり」の広がりとともに、ワークショップ手法への関心が高まっていますが、第1回が高知県香北町で、2回目が北九州で開催された「わくわくワークショップ」の第3回全国交流会が、今年新潟県大潟町で開催されます。

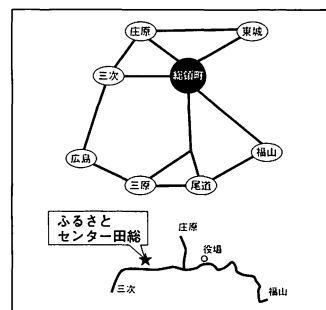
- 日時・場所 平成11年5月21日(金)～23日(日)
新潟県中頸城郡大潟町(メイン会場)ほか
- プログラム (予定)
1日目 10:00～受付
ワークショップ入門講座ほか
2日目 テーマ別ワークショップ
最終日 全体ワークショップ(12:30終了)
- 申込み問い合わせ ☎0255-35-1247 開催実行委員会事務局
<http://www.pavc.ne.jp/wakuwaku3/>



第17回逆手塾

東京では出来ないまちづくりを実践する「過疎を逆手にとる会」主催の逆手塾が、今年も元気に開催されます。新しいまちづくりのヒントや活力を発見したいとお考えのあなた、ぜひ参加してみてください。参加費 20,000円の価値は、十分あります。

- 日時・場所 平成11年6月12日(土)～13日(日)
広島県甲奴郡総領町 ふるさとセンター田総
- プログラム (予定)
13:00～開会、リレー講演
(ゲスト: 亀地宏さん他)
人源がご馳走、勝手に楽習会
翌日 輝爆剤登壇、過激なまとめ(13:00閉会)
- 申込み問い合わせ ☎0824-66-2317
カソサカ事務局長 宮崎文隆さん

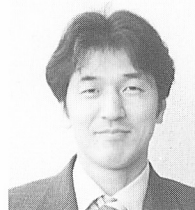


春です。異動の季節です。

■平成11年度 まちセン職員（☆印は新しいスタッフです）



（後列左から） 研究員 小川 龍児（県信用農協連） 研究員 檜垣 明宏（弓削町） + α
（前列左から） ☆研究員 沖田 敏広（肱川町） 所長 渡部 正人 主任研究員 藤田 享（愛媛県）

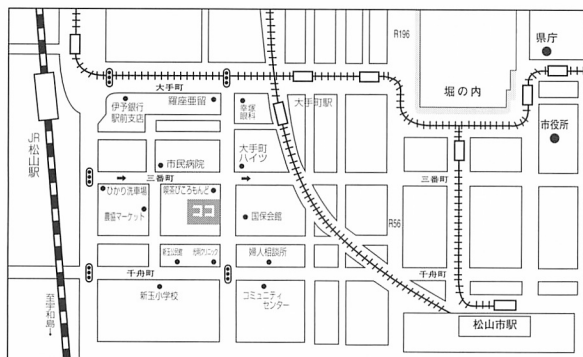


伊手 博志

★2年間センター研究員として勤務された伊手さんが、津島町役場に帰られました。

これからも、客員研究員としてよろしくお願いいたします。

ところで、まちセンの場所 ご存じですか？



コーヒーでも
飲みにお気軽に
お立ち寄り
ください。



瀬戸内しまなみ海道いよいよ
五月一日開通です。

島でなくなる島で生まれ育った者の一人として、何か感ひとしおのものがありません。

かつて、この海と島を舞台に跋扈した水軍衆のように、地域の人々が、橋と自然をしたたかに活かして、暮らし続けていただければと思います。

sf

内容についてのご意見やまちづくり活動のトピックなどありましたら、お気軽に『舞たうん』編集係までお寄せください。

〒790-0003

松山市三番町八丁目三三四

愛媛県生活保健ビル三階

（財）愛媛県まちづくり総合センター

TEL 089（932） 7750

FAX 089（932） 7760

発行／平成十一年四月十二日

（財）愛媛県まちづくり

総合センター

印刷／三創印刷株式会社